



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「公衆主義の陥穽」 : フルシチョフ主義の挫折 (II)
Author(s)	木村, 汎; Kimura, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 22, 105-134
Issue Date	1978-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5070
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113211.pdf



「公衆主義」の陥穽

——フルシチョフ主義の挫折（その二）——

木 村 汎

序論—「フルシチョフ主義」—

そもそも通俗的ジャーナリスティックな語法ではなく、より厳密な意味で一体「フルシチョフ主義」と名のる概念が成立可能であろうか？——これは、大いに議論の余地ある問である。ウクライナの片田舎カリノフカ村の一鉦夫の家に生まれたフルシチョフ（H. C. Хрущев；1884-1971）が、ポスト・スターリン期の約10年ばかりの期間¹⁾、米国と並びたつ世界の大国・ソ連邦の最高統治責任者の座を占拠していたことは、紛れもない歴史的事実である。しかし、問題は、飽くまでもその在任期間に彼が何をなしたかという統治の中身である。はたして、フルシチョフは、この十年間に、ソ連史に一時代を劃するような独創性や新機軸を打ち出したかどうか？レーニン主義やスターリニズムと並んで、「フルシチョフ主義」と呼ぶに価する、すぐれて個性的な刻印をソビエト政治史上に捺しえたであろうか？大いに争われる処なのである。

まず、否定論者。たとえば、反スターリン主義者の典型たる故 I. ドイツチャーですら、「スターリン期にかんしてはまだ何かを語りえても、フルシチョフ期にかんしては語るべき何ものも存在しない」²⁾と、非常に冷たい。というのも、ドイツチャーによれば、フルシチョフ主義は、なんらそれ自身の「積極的なアイディア（ないし政策すら）を体现していない」³⁾からに外ならない。また、英国のソ連通ジャーナリスト・故 A. ワースが、フルシチョフ在任の十年間を、フルシチョフ「時代 (epoch)」でなく、たんにフルシチョフ「段階 (phase)」と呼ぶべきと主張した⁴⁾根底には、フルシチョフ主義にたいする彼の消極的な評価が前提とされている。けだし、ワースによれば、epoch は、「特徴の極めて明確な、一つの完成したもの」⁵⁾を示唆する語感をもつのにたいし、phase は、「はるかに流動的な性

1) フルシチョフ期の長さを決めることは、かなり厄介な問題である。その終末点が、失脚時の1964年10月であることは、余りにもはっきりしているが、その開始点は、フルシチョフの地位が漸進的強化を遂げた事情により、必ずしも一義的に定めえないからである。つまり、フルシチョフが、マレンコフから第一書記のポストを奪ったのは1953年9月であり、つづいてマレンコフの代りに自分の意のままになるブルガーニンを首相に据えたのは1955年2月のことであり、非スターリン化の主役を演じたのは1956年2月であり、「反党グループ」のレッテル下にライバル達を最終的に打倒したのは1957年6月であり、ブルガーニンから首相の地位を剝奪し名実共にソ連指導者中のナンバー・ワンとなったのは1958年3月のことだったからである。

2) Isaac Deutscher, "The Failure of Khrushchevism," *Ironies of History: Essays on Contemporary Communism* (London: Oxford University Press, 1966), p. 121; 山西英一訳『現代の共産主義：歴史の逆説』（東京：番町書房，1974），p. 152.

3) *Ibid.*; 同上。

4) Alexander Werth, *Russia Under Khrushchev* (New York: Hill and Wang, 1962), vi; 湯浅義正訳『変るソ連—フルシチョフが出てから—』（東京：岩波書店，1963），まえがき。

5) *Ibid.*; 同上。

質」⁶⁾を表わすから、ソ連の歴代指導者中「もっとも変り易く、もっとも経験主義的で、また時によりその言動がもっとも予想しにくい」⁷⁾フルシチョフの10年を表現するのには、後者こそふさわしく、決して前者であってはならない、と言うのである。

かように、フルシチョフ主義のなかに「積極的」ないし「特徴の極めて明確な」内容を認め難いとする立場は、フルシチョフ期を、より重要な時代から同様により重要な別の時代へ至る過渡期 (a transition period) にすぎないととらえ、フルシチョフ自身をもたんに「過渡的な指導者」(a transitional leader) と看做す見解に傾きがちである⁸⁾。上に紹介した西側の二人のソビエト通の見解が、正にそうだといえる。すなわち、フルシチョフ期を、ドイッチャーは一時的、暫定的な⁹⁾「短い中間期」¹⁰⁾、ワースは「流動と移行」¹¹⁾の時期である、と規定するのである。なお、そのほか、英国随一のクレムリノロジストの R. コンクェストや米国のフルシチョフ研究者 C. リンデン教授も、まったく同様に、「フルシチョフ期はソビエト政治における移行期であり、フルシチョフを一時的指導者と見なしうる」¹²⁾ (強調点—木村) としている¹³⁾。

6) *Ibid.*; 同上。

7) *Ibid.*; 同上。

8) 他方、フルシチョフ期をたんなる過渡期と看做しつつ、しかもフルシチョフ主義のユニーク性を承認する見解もとうぜんありうる。たとえば、M. フラン克蘭ドは、「フルシチョフが、合意された諸政策を遂行するにさいして選んだスピードとスタイルはユニークな貢献で、正当にフルシチョフ主義と呼ぶうる」と述べる一方、フルシチョフ期を「過渡期」とみなしている。Mark Frankland, *Khrushchev* (New York: Stein and Day, 1967), pp. 147-148, p. 189, p. 208.

9) Deutscher, "The Khrushchev Interregnum," in *id.*, *The Great Contest: Russia and the West* (New York: Ballantine Books, 1961), pp. 38-39; 山西英一訳『大いなる競争—ソ連と西側—』(東京: 岩波書店, 1961), p. 31.

10) *Ibid.*, p. 39; 同上訳, p. 31; Deutscher, "The Failure ...", p. 120; 同邦訳 p. 152.

11) Carl Linden, *Khrushchev and the Soviet Leadership: 1957-1964* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press, 1966), p. 208.

12) R. コンクェストも、フルシチョフ統治下の1963年に、「ソ連が現在移行期にあることは、衆目の一致するところである」と書き、1975年には、フルシチョフが「典型的な、当座の (interim) 人物」だったと看做した。Robert Conquest, "After Khrushchev: A Conservative Restoration?," *Problems of Communism* (No. 5, Sep.-Oct., 1963), p. 41; *id.*, "A New Russia? A New World?," *Foreign Affairs* (April, 1975), p. 489.

13) 本稿筆者も、かつて、このような見解に傾いたこともあった。拙稿「移行期としてのフルシチョフ期 (一)—現実主義とユートピアニズムとの混淆—」、『神戸学院法学』(第1巻, 第1号), pp. 99-144 参照。わが国においても、原子林二郎氏は、フルシチョフ路線の過渡的性格を強調された。原子林二郎「フルシチョフ路線の過渡的性格」, 日本国際政治学会編『共産圏の研究』(季刊『国際政治』, 東京: 有斐閣, 1963), pp. 12-13. 米『ワシントン・ポスト』紙の元モスクワ特派員 R. カイザーも、ソビエト科学者が、ブレジネフ期は1970年中頃、「全体主義的安定」の新しい時期に入り、スターリンの死後10年間続いた自由化への「移行期」(すなわち、フルシチョフ期—木村) ならびにさらにその後10年間続いた正統と安定の方向へ後退を見せた「移行期」が完全に終りを告げた、とみる見解を紹介している。Robert G. Kaiser, *Russia: The People and the Power* (London: Secker and Warburg Limited, 1976), p. 448.

以上の、フルシチョフ期=移行期とみなす見解にたいして、T. サムエイは、スターリン死後から現時点 (=1969年—木村) に至るまでの全時期 (すなわち、フルシチョフ期+ブレジネフ期—木村) を一つの移行期とみなす見解、あるいは寧ろ逆に、スターリン時代こそ、初期の革命時代と現代との間に横たわる移行期と考える実に大胆な見解を提出している。Tibor Szamuely, "Five Years After Khrushchev," *Survey* (No. 72, Summer, 1969), p. 52, 59. D. P. ハマー教授も、30年間に及ぶ全スターリン時代を移行期とみなす。Darrell P. Hammer, *U.S.S.R.: The Politics of Oligarchy* (Hinsdale, Illinois: The Dryden Press, 1974), p. 4.

しかし、果して、フルシチョフは、このように独自の主義・主張のない「当座の (interim) 政治家」¹⁴⁾ (R. コンクエスト) と評価されるだけで済ましてよい存在だったろうか。とうぜん、反論がある。政治思想面を例にとろう。通常フルシチョフの思想的中核として指摘されるのは、内政におけるスターリンの個人崇拜の批判や「全人民国家論」、外交における三原則——戦争不可避論の否定、平和共存、社会主義への多様な途——等々、である。これらを、どう評価すべきか？ なるほど、これらは、レーニンの前衛理論や帝国主義論、スターリンの一国社会主義論に匹敵するような、マルクス主義の独創的かつ体系的な展開ではないかも知れない¹⁵⁾。とはいうものの、それらが、伝統的なマルクス・レーニン・スターリン主義を大胆に逸脱ないし修正していることも亦、間違いない事実ではないか。また一步譲って、たとえ理論体系としては不十分であろうとも、内外の現実政治にたいする衝撃力の大きさの見地から秤るならば、これらが一概にレーニンやスターリンの理論や政策のイムパクトに著るしく劣っていたとは益々言い難いのではないか？

たとえば、ソ連の原水爆の父であり同時にノーベル平和賞の授賞者でもある A. サハロフのフルシチョフ観が、そうである：曰く、「ソ連共産党第 20 回大会宛てのフルシチョフの大胆な (非スターリン化の秘密) 演説、ならびにそれに伴う一連の施策——幾十万人も政治犯の釈放や名誉回復、平和共存原則の再建や民主主義の再建へのステップ——が、われわれに、フルシチョフの歴史的役割をひじょうに高く評価させるのである」¹⁶⁾。また、フランス切っのソ連問題専門家 M. タチュにいたっては、「非スターリン化というこの唯一の事由だけでも、フルシチョフは、歴史上に記憶されるだろう」¹⁷⁾、とさえ極言するのである。

さて、思うに、このように賛否両論のある「フルシチョフ主義」概念の成立可能性についての最終的判断が、具体的、実証的な研究の後にはじめて下されるべきこと、改めて述べるまでもない。とはいうものの、何らかの思考の軸を前もって設定しておいた方が、具体的な研究をより効果的に進めうることもまた真である。つまり、「概念規定は、本来、研究の到達点であって出発点ではない。しかし、一応の概念規定なしには、研究を進めることもできない」(猪木正道)¹⁸⁾とも言っているのである。あくまでこのような意味における

14) Conquest, "A New Russia? ...," p. 489.

15) ドイツチャーは、これらすべてを、「1930 年代中頃の人民戦線と 1940 年代中頃の民族連合政権にはじまる、スターリン的観念の焼直しである」ときめつける。Deutscher, *Ironies ...*, p. 121; 邦訳, p. 152.

16) Andrey D. Sakharov, *Progress, Coexistence, and Intellectual Freedom* (New York: W. W. Norton and Company, Inc., 1968), p. 49; 上申太郎/大塚寿一訳『進歩、平和共存および知的自由』(東京: みすず書房, 1969), pp. 46-47. しかし、フルシチョフ自身は、その回想録の中で、スターリンの行き過ぎ非難など、彼が 20 回党大会で示した「智慧」(毛沢東) は、「われわれ自身のものではなく、レーニンの智慧であり、われわれが遅まきながら再発見したものである」と謙遜している。Khrushchev *Remembers: The Last Testament* (London: Andre Deutsch, 1974), p. 251; 佐藤亮一訳『フルシチョフ 最後の遺言』(東京: 河出書房新社, 1975), 上巻, p. 263.

17) Michael Tatu, *Power in the Kremlin: From Khrushchev to Kosygin*, translated by Helen Katel (New York: The Viking Press, 1969), p. 141.

18) 猪木正道教授が、かつて「独裁」概念を再検討されるにあたり、述べられた言葉。猪木正道『独裁の政治思想』(東京: 創文社, 1961), p. 4.

仮説として、筆者は、以下の小稿をはじめに当って、まず「フルシチョフ主義」なるものの存在を前提とすることにしたい。

ところで、「フルシチョフ主義」の存在を主張し、まさにそのことによりフルシチョフ期をソ連史上のたんなる「移行期」として片付けることに肯んじえない論者たちは、では一体フルシチョフの何をもってその「積極的」ないし「明確な」特徴と看なすのか？つまり、彼らが「フルシチョフ主義」を提唱するとき、彼らはいかなる具体的内容を頭に思い描いているのか？——このことが、つぎの問題とならねばならない。ところが、この基本的な問にたいし、論者間に必ずしも一致した見解が存在しない状況なのである。まことに残念至極といえる。つまり、彼ら全ては、「フルシチョフ主義」の成立可能性を信じている点においては意見を一にしている反面、「フルシチョフ主義」の具体的内容にかんしては統一見解を共有せず、まさにそのことによって本来の主張の説得性を若干弱めているのである。ともあれ、まだ一義的な結論にまで到達していないのは動かしがたい事実であるからして、ここでは先ず一、二代表的な見解を紹介し、そのあと筆者自身の考えを述べるという手筈で満足せざるをえない。そのいずれの見解にも共通しているのは、——きわめて当然至極のこととはいえ——、各々が「フルシチョフ主義」の最大メルクマールと看なすものがポスト・フルシチョフ政権によって見事否定ないし消去されていると主張しうること、さらに言うならば、まずフルシチョフ政権とブレジネフ政権との間の不連続面を構成する諸点に目をつけて、そのなかから最も特殊フルシチョフ的な中核的要因を別抉しようとしていることである。

(1) まず、サハロフやタチュは、既に紹介したごとく（前ページ）、非スターリン化こそ、「フルシチョフ主義」の真髓と考える¹⁹⁾。つまり、非スターリン化は、たしかに、たとえフルシチョフでなくとも、ポスト・スターリン期のソビエト政治を承継するいかなる統治者によっても採らねばならなかったであろう時代の要請であったかも知れない。とはいえ、あの規模における非スターリン化は、やはりフルシチョフ個人を離れて到底考え難いのではないか。その良い証拠に、フルシチョフの後を襲ったブレジネフ政権は、少くとも政治・思想的側面において、「スターリニズムへの復帰」²⁰⁾ないし非スターリン化の中止を命じたではないか。

しかし、「フルシチョフ主義」の特徴を非スターリン化に求める、このような見解にも、弱点がない訳ではない。というのも、一つには「非スターリン化」なるものが所詮相対的な概念にすぎないからである²¹⁾。つまり、スターリニズムとは、その30年に及ぶソビエト社会にたいする君臨・支配によりすっかり今日のソビエト体制の抜きとり難い一部分すな

19) 故 M. フェインソド教授も、「フルシチョフ主義」と題する論稿中において、「以後フルシチョフ主義と呼ばれるようになったものの内容を定義するためには、第20回党大会の（スターリン弾劾）秘密演説を待たねばならない」と書いている。Merle Fainsod, "Khrushchevism," in Milorad M. Drachkovich (ed.), *Marxism in the Modern World* (Stanford, California: Hoover Institution on War, Revolution, and Peace, 1965), p. 113; 木村汎訳『現代のマルクス主義—二十世紀に挑戦する思想家たち—』（東京：社会思想社、1967），p. 152.

20) 拙稿『『矮小』政権の強硬路線』、関西外交史研究会編『現代外交の理論と歴史』（京都：有信堂、1971），pp. 359-384，とくに p. 381 の注（9）参照。

21) 拙稿「党史と政権—歴史的・比較的研究—」、『スラヴ研究』（J To. 16, 1972），p. 24 参照。

わち体質と化している²²⁾事情のために、完全な非スターリン化は、即ソビエト体制の否定に繋りかねない重大事として、何人も敢えて挑戦し得ないタブーだからである。フルシチョフ自身が、第20回党大会(1956)のスターリン弾劾演説後も、依然として「《スターリニスト》は、スターリン同様、共産主義という偉大な名称から不可分である」(1957)²³⁾と述べ、一部の西側観測者により結局「伝統的なソビエト統治システムの捕囚(prisoner)」²⁴⁾にとどまったと評せられた所以である。要するに、フルシチョフの非スターリン化は、部分的で中途半端なそれ、さらに言うならば自己権力の正当化ならびに支配の貫徹に都合のよい範囲内での非スターリン化であり、その意味において、正反対の方向をとったとはいえず、類似の動機から部分的な再スターリン化²⁵⁾を得策と考えたブレジネフ主義との間には、所詮相対的・量的な差しか存在しなかったとさえ極論されうるのである。

(2) つぎに、既述のフラン克蘭ドや R. コンクェストは、「フルシチョフ主義」の特徴を、彼の主張や行為の内容にではなく、むしろ彼の仕事の進め方のスピード、方法、スタイルのユニーク性に求めようとしている。たとえば現在までのところ最良のフルシチョフ伝を書いた M. フラン克蘭ドは、述べる：

「彼(=フルシチョフ=木村)のユニークな貢献——それは、フルシチョフ主義と呼ばれて然るべきと思われるのだが——は、彼が、合意された諸政策を執行するさいに、選んだスピードとスタイル(the speed and style)にあった。」²⁶⁾

また、R. コンクェストも、「フルシチョフの行動の全体を通じて、とくに注目に値するものは」、「特定の政治路線のみではなく——それは、おそらく、主要なものではなかったろう——」、「むしろ、ロシア人自身がしばしば彼の“指導スタイル”——奇妙な、なかば審美学的な用語だが——と呼んでいるもの」²⁷⁾だったと述べ、さらに言葉を足し次のように敷衍している：

「もし、われわれが、フルシチョフが過去10年内におこなったいろいろな行動に統一的な契機を求

22) 故トリアッチは、個人(=スターリン)とソビエト体制の密接な関係を鋭く追求した(Palmiro Togliatti, “9 Domande sullo Stalinismo,” in The Russian Institute, Columbia University (ed.), *The Anti-Stalin Campaign and International Communism*, New York: Columbia University Press, 1966, pp. 120-121, 128)が、ソビエト公式見解は、この結びつきを否定した。См. “О преодолении культа личности и его последствий,” *КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК* (М.: Госполитиздат, 1960), часть 4, стр. 231 ff.

23) *Правда* (19 января 1957 г.), стр. 2.

24) Abram Brumberg, “The Fall of Khrushchev—Causes and Repercussion,” in John W. Strong (ed.), *The Soviet Union Under Brezhnev and Kosygin* (New York: Van Nostrand Reinhold Company, Ltd., 1971), p. 14.

25) A. ワースも、スターリン主義は一度もなくなったことはないのだから、スターリン主義に復帰するということとはあり得ないという理由で、ブレジネフ政権下のスターリン主義復帰(return)という表現は正しくなく、むしろ強化(intensification)ないし生き返り(revival)とみるべきと主張する。Alexander Werth, *Russia: Hopes and Fears* (London: Penguin Books Ltd., 1969), preface; 内山敏訳、『ロシア—希望と懸念—』(東京: 紀伊国屋書店, 昭45), iv. 原子林二郎氏も、同様の趣旨から、返り咲きという表現を提唱される。「返り咲くスターリン主義」、『週間時事』(東京: 時事通信社, 第11巻, 第49号, 1969年12月13日号), p. 35.

26) Frankland, *op. cit.* p. 148. なお本稿注8(106ページ)も参照のこと。

27) Robert Conquest, *Russian After Khrushchev* (New York: Frederick A. Praeger, 1969), pp. 110-111; 井上勇訳『フルシチョフ以後のソ連』(東京: 時事通信社, 1967), 上巻, p. 161.

めようとするならば、方向(direction)よりも、むしろ調子(tone)の一貫性があったことのほうに、容易に気づくだろう。フルシチョフの“流儀(style)”は、事実、キューバの場合のように、大げさな思いつきと思慮を欠いた行動によって、政治問題の解決を企てることだった。²⁸⁾

たとえ、フルシチョフのコトの進め方の性急さや、思慮を欠いた統治スタイルが、「フルシチョフ主義」に一貫して通ずる特色であると一般化しないまでも、少なくともそのような彼の流儀に、フルシチョフの失脚原因を帰している者は、少ない。たとえば、ソビエト反体制知識人の中で一派をなすジョーレス＝ロイ・メドヴェージェフ双生兄弟は、フルシチョフのおこなった、党、教育、工業、農業にかんする改革すべてが、「その移行スピードゆえに否定的な結果を導いた」²⁹⁾ことを、度々指摘する。また、故 P. モーズリー(コロンビア大)教授も、「彼の個性ならびに統治スタイル」³⁰⁾こそがフルシチョフの失脚を導いた最大の要因と、結論した。さらに、ソ連自身の公式的見解も、このような見解にきわめて近いのである。すなわち、ブレジネフ、スースロフらによるフルシチョフ更迭の公式的理由付けと看なしてよい、1964年10月17日付『プラウダ』論説は、フルシチョフのおこなった具体的な政策内容を批判する代わりに、彼の「主権主義、無計画、大言壮語、早熟な結論、現実から遊離した決定や行動、自慢や空疎なおしゃべり、行政管理替えへの熱中…」³¹⁾、といったフルシチョフの手法に非難を集中したのであった。

そして、このように説く見解も、統治スタイルという点にかんして言うならば、たしかにフルシチョフとブレジネフとの間には著るしい非連続性が看取されることは事実であるから、説得性を増大させる。つまり、ブレジネフ＝コスイギン & Co. は、一方においては(一とくに、その経済政策の側面において)、フルシチョフ路線をまったく忠実に継承しているどころか更に一層強化さえしている(いわゆる「フルシチョフなきフルシチョフ主義」³²⁾)反面、その政策の形式ならびに遂行の方法(methods)³³⁾、流儀、速度の側面においては、フルシチョフのそれらとは際だった対照をなしている。すなわち、ブレジネフ主義の特色は、「臆病かつ狭量」(Z. ブレジンスキー)³⁴⁾とまでに評せられる、万事を「分別という厚いヴェールの背後で」(故 I. ドイッチャー)³⁵⁾決する、「慎重な現実主義(the cautious realism)」(F. バグホーン)³⁶⁾的手法である。もちろん、これらの評言がすべて、

28) *Ibid.*, p. 111; 同訳, 上巻, p. 162.

29) Roy A. Medvedev, Zhores A. Medvedev, *Khrushchev: The Years in Power*, translated by Andrew R. Durkin (New York: Columbia University Press, 1976), p. 143. なお p. 127 も参照。

30) フルシチョフ解任直後, Philip E. Mosely (同大学元ロシア研究所々長, 当時ヨーロッパ研究所長)が, コロンビア大学 The Foreign Student Center でおこなった講演。

31) *Правда* (17 октября 1964 г.), стр. 1.

32) たとえば、「フルシチョフはなぜ退陣したか」(1964. 11. 21), 『改訂 国際共産主義運動の総路線についての論戦』(東京: 東方書店, 1975), p. 384. なお Robert Conquest, “Khrushchevism Without Khrushchev,” *The New Reader* (No. 23, 1964), pp. 10-11; Leon Smolinski, “Khrushchevism Without Khrushchev,” *Problems of Communism* (Vol. 14, No. 3, May-June 1965), pp. 42-44 も参照。

33) Brumberg, *op. cit.*, p. 14.

34) 猪木正道「ソ連・東欧諸国の政治動向」, 『共産圏の動き』(東京: 欧ア協会, 1968), p. 29 から再引用。

35) Isaac Deutscher, *Russia, China, and the West* (London: Oxford University Press, 1970), p. 300.

36) Fredrick C. Barghoon, “Prospects for Soviet Political Development: Evolution, Decay,

ブレジネフ政権の発足当時に西側観測筋によって与えられた性格規定であることは確かであるが³⁷⁾、ブレジネフ個人の實力と地位が著るしく伸長した10余年後の今日においても、大むね妥当し、ことさら大幅な修正を要する評言と思われないのである。というのも、ブレジネフ政権のダイナミズムを欠き、用心深い漸進主義的統治メソッドは、必ずしもフルンチョフ主義のアンチ・テーゼたらんとした作為的³⁸⁾契機に基づいているばかりでなく、元来「退屈で」³⁹⁾、「色彩に乏しい」⁴⁰⁾ブレジネフら「無表情のマネジャー」⁴¹⁾たちの個性に発する現政権の拭き難い体質的側面の反映に他ならないからである。

しかし、以上のように説く見解にも欠陥がある。すなわち、まず、そもそも統治や路線の實質的内容ではなく、そのスタイルやスピードといった技術的なものを、果して「フルンチョフ主義」を成立せしめる主要特徴とみなしうるのか。大いに疑問なしとしないであろう。つぎに、およそ政治的決定なるものは、——L. スモリンスキーが説くように——、すべて本来、「性急で、半熟で、直観に基づか」⁴²⁾ざるを得ないものではなからうか。たとえば、この視点からみて、一体フルンチョフによるキューバからの撤退(1961)とブレジネフによるチェコスロバキア介入(1968)の決定との間になに程の差異が見受けられるだろうか。フルンチョフとブレジネフの手法を、性急な即興曲 vs. 慎重かつビジネスライクな決定といった対抗図式で描くよりも、むしろ「種類でなく程度の差」(スモリンスキー)⁴³⁾として捉える方が、より真相に近いのではないか、等々の疑問を提出することが可能なのである。

(3) 最後に、本稿筆者の見解はどうか? 筆者は、「フルンチョフ主義」の内政面における最大の特色を、つぎの2点に求めると考える。第1は、いわゆる「グラス共産主義」なる用語でもっともよく表現される、共産主義建設にかんする(経済面重視の)修正主義的路線である。その主要的内容は、(a) なによりも物質的豊饒こそを、共産主義の最重要メルクマールと捉え、(b) 物質的刺戟のインテンシブな利用を通じて、(人間)労働生産向上に努め、(B) はるか遠い未来でなく、もっと近いヴィズィブルな時点において、そのような共産主義の物質的・技術的基盤の実現を図ろうとする路線である。恐らく、かような物質的契機の重視は、唯物主義者たる他のすべてのソビエト指導者たちによっても均しく同様に認識されたことと反論されるかも知れない。しかし、筆者は、「経済主義」

or Revolution?" in Kurt London (ed.), *The Soviet Union: A Half-century of Communism* (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press, 1968), p. 83.

37) 拙稿「『矮小』政権の強硬路線」, pp. 359-368; John Dornberg, *Brezhnev: The Masks of Power* (London: André Deutsch Limited, 1974), pp. 13-15 参照。

38) 発足当時のブレジネフ政権を、『ニューヨーク・タイムズ』紙は、「意図的に (deliberately) 人間性を押し殺している」と評していた。*The New York Times* (Jan. 24, 1965).

39) *The New York Times* (May 2, 1966; Oct. 12, 1967).

40) たとえば, *The New York Times*, (April 4, 1965; May 2, 1966); Adam B. Ulam, *Expansion and Coexistence: The History of Soviet Foreign Policy 1917-1967* (New York: Frederick A. Praeger, 1967), p. 573; Fredrick C. Barghoon, "Changes in Russia: The Need for Perspective," in Zbigniew Brzezinski (ed.), *Dilemmas of Changes in Soviet Politics* (New York: Columbia University Press, 1969), p. 411.

41) Martin Page, *The Day Khrushchev Fell* (New York: Hawthorn, Inc., 1965), p. 169.

42) Smolinski, *op. cit.*, p. 44.

43) *Ibid.*

「修正主義」，はては「資本主義の復活」との貶価的レッテルをものともせず，これを自己の政策の要^{かなめ}に据えたところに，「フルシチョフ主義」の歴史的意義がある，と考える。但し，「フルシチョフ主義」のこの側面については，筆者は，別稿で詳述している⁴⁴⁾ので，これ以上立ち入ることを避ける。

第2は，いわゆる「公衆主義」なる用語に要約される特色で，その意味ならびに内容の検討を，まさに以下の本稿が主要課題にせんとするものである。後述するがごとき意味における「公衆主義」こそ「フルシチョフ主義」の第2の特色とみる筆者の立場は，上述した西側の2つの代表的見解とどの点において異なるのか？ 簡単に説明せねばならない。まず，それがスターリンのいわば非公衆主義的立場，すなわち「幹部重点主義^{カードル}」ないしエリート主義の遺産を克服しようとするモメントを担っていたという意味において，筆者の考えは，「フルシチョフ主義」の最大特色を「非スターリン化」に求める(1)の立場にきわめて近いと言いうる。しかしながら，フルシチョフ「公衆主義」が決して単なる「非スターリン化」の域にとどまらず，さらに新しい統治戦略の開発を目指す内容のものであったと解する点において，筆者の立場は，上述(1)のそれとハッキリ異なっている。つぎに，「フルシチョフ主義」の独自性をその方法やスタイルといった技術的な範囲にとどめない点において，筆者の見解は，(2)のそれと全く異なるといわねばならない。そして，最後に，ブレジネフ政権が，フルシチョフ「公衆主義」路線ならびにその主内容をなす現象形態の多くを，(名義上ではなく)実質上⁴⁵⁾，否定したという点からみても，「公衆主義」は，「フルシチョフ主義」の独自の特色と看なされる資格を十分主張しうると考える。

I. 「公衆主義」とは？

「公衆主義」(общественные начала; public principles; Ius populi)とは，適当な日本語への翻訳がまったく不可能な概念である。それは，ソ連邦独自の政治的文化のコンテキストのなかにおいて初めて理解される，特殊ソビエト的概念といえる。そのより正確な意味内容は，本稿全体のなかで順を追って明らかにされてゆくほかない。さしあたってここでは，旧来のスターリン体制において，意識的・無意識的に排除されていた人民大衆を広範に国の政治・経済・文化活動に「惹き入れ」(привлечение)，「参加」(участие)させようと試みるフルシチョフ的路線，と定義しておこう。本稿筆者が「人民」でなく，「公衆」という日本語としてきわめて奇異な訳語を敢えてあてる理由は，それが——後述のごとく——単純に「人民」の利益の伸長を目指すものではなく，むしろ「公共」の美名のもとにソビエト「動員」体制にたいする人民の側の協力拒否をよりむつかしくするという「社会主

44) 拙稿「移行期としてのフルシチョフ期 (一)—現実主義とユートピアニズムとの混淆—」，『神戸学院法学』(Vol. 1, No. 1, 1970年3月)，pp. 99-143; “Personal Property in the Soviet Union, With Particular Emphasis on the Khrushchev Era: An Ideological, Political and Economic Dilemma,” (I) and (II), 『スラヴ研究』(Nos. 13 and 14, 1969 and 1970); 「物質的インセンティブの限界—フルシチョフ主義の挫折 (その一)—」，『スラヴ研究』(No. 21, 1976), pp. 83-156.

45) ごく一例をあげると，フルシチョフ「公衆主義」の適例たる「全人民国家」概念は，ブレジネフ政権によっても，その憲法の中核に据えられたが(『Правда』, 4 июня 1977 г., стр. 1)，その概念内容は，フルシチョフ政権期のそれとは，まったく別箇の概念と呼ばれる程に換骨奪胎されているのである。拙稿『「全人民国家」論とその後—とくに，ソビエト政治におけるその機能変化について—』，『共産主義と国際政治』(Vol. 1, No. 2, Oct.-Dec. 1976), pp. 33-50 参照。

「公衆主義」の陥穽

義」思想における特殊な「公共」概念のニュアンスをコトサラ強調したいからに他ならない。

かような真の狙いや動機の検討はさておき、まず差しあたり、フルシチョフの述べるところを額面通りに受けとって、フルシチョフの公衆主義の思想内容を見ることにしよう。かなり長文とはなるが、いきなり引用したいのは、1962年12月開催の党中央委総会の席上における彼の発言である。共産党を工業、農業部門に二分割するという大決定をおこなったことで有名な同総会において、フルシチョフは、党アパラチキ（専従有給幹部）を監督する党・国家統制委員会の導入というもう一つの重要決定をおこない、その決定を捉す契機として、人民(コントロール)重視の思想を強調したのである。すなわち、彼は、言う：

「スターリンは、大衆を信じなかった。彼は労働者政党のメンバーではあったが、労働者を尊重しなかった。労働者出身の人間について、彼は、軽蔑的に語っていた：『機械の下からは出してきたのだ！ 何だって出しゃばるのだ！』と。

ウラジーミル・イリーイチ・レーニンは、大衆を深く理解し、つねに労働者と共にいた。革命後、レーニンは、長くは生きなかったが、彼がいかに密接に大衆と結びついてきたか、みてみよ。彼のところには、いつも農民の訪問者、労働者、兵士の代表が来ていた。彼は、なん10キロもある電車の開通記念のために農村へ出かけた。彼は、人々、農民のところへ行き、彼らと会い、耳を傾けようと欲し、他人の報告にもとづいて彼らの気分を判断することを好まなかった。彼は、会合に——この会合、あの会合に——出席した。一体、他の弁士は居なかったのか？ 居たのである。しかし、レーニンは、工場にしばしば行くことを欲し、ただしゃべるだけでなく、人々がどんな生活ぶりをしているかを見ることを欲し、労働者たち——彼らのために結局、レーニンは、生き且つ働いているのだが——の気分を識り、感じることを欲した。

スターリンは、どこに居たか？ 彼は、あるとき《ディナモ》工場へ赴いたことがあったが、トロツキストやジノヴィエフ派との闘いが進行中の時だけだった。この後、スターリンは、工場に赴くことはなかった。行くのは、別荘とクレムリンだけであった。クレムリンは、訪問者には閉ざされていた。街に行くのを恐れ、人間を恐れた。装甲された小部屋のなかに閉じこもった。人民との接触（связи с народом）のない人生なんて、何だろうか（嵐のような長くつづく拍手）。

スターリンは、どうして、このように振るまったのか？ 彼は、大衆との関係をもつ必要を経験したことがなかった——農民から隔離し、労働者から隔離していた。…

すべて、これらのことは、労働者階級の利益、大衆の利益に、實際上、応えていたか？ 否である。…

ここにレーニンとスターリンと差異があるのだ。われわれは、レーニン主義の大義ならびにレーニン主義的方法の理念を信ずる（嵐のような長い拍手）。¹⁾

改めて説明するまでもなく、ここでフルシチョフが含意しているのは、彼自身が、スターリン的人民蔑視の態度を改め；まさにレーニンが教え、実践したとき「人民との接触」の回復に努めるといふ立場の宣明に他ならなかった。

このような形で寓意されたフルシチョフ「人民主義的 (populist)」²⁾ (U. フェインソド)

1) Пленум Ц.К. К.П.С.С. (19-23 ноября 1962 года): (стенографический отчет) (М.: Госполитиздат, 1963), стр. 90-91. フルシチョフは、スターリンが、とりわけ、人民大衆のうちその大半を占める農民を蔑視していたことを、失脚後も依然として、攻撃している。すなわち、「スターリンにとって、農民は人間の屑だった」にはじまる彼の『回想録』中の、スターリン農政失敗を弾劾したくだりを見よ。Nikita Khrushchev, *Khrushchev Remembers: The Last Testament*, (New York: Little, Brown and Company, Inc., 1974), p. 112; 佐藤亮一訳『フルシチョフ 最後の遺言』(東京: 河出書房新社, 1975), 上巻, pp. 125-128.

2) M. Fainsod, *op. cit.*, p. 129; 邦訳, p. 167.

思想は、きわめて断片的で統合化されてないとはいえ、様々の具体的なヴァリエーションの形を借りて、すでにそれ以前またはそれ以後の段階に、フルシチョフによって繰り返し繰り返し吐露されている。すなわち、フルシチョフは、「エリート」すなわち党や政府の専従職員が、あるときは「大衆のもとへ赴くべし」、あるときは「大衆とともに働くべし」、又あるときは「大衆を信頼するべし」、等々といった形で、同一思想を訴え続けたのである。このばあい、「大衆」とは、ソフホーズならびに МТС（機械トラクター・ステーション）に働く労働者やコルホーズに働く農民、すなわち勤労大衆一般を意味している。

たとえば、すでに引用した党中央委総会（1962. 11. 19）の演説中において、フルシチョフは、以下のごとく党员や官僚たちに「労働者のところへ赴く」よう訴えている：

「労働者のところへ（к рабочим）赴きなさい。彼らと腹を割って語りなさい。…そうすれば、彼らは、あなた方を正しく理解するだろう。しかし、そうするためには或る種の行政官僚がなしているようにはなく、労働者の同志として労働者のところへ赴くことが必要なのである。そうすれば、労働者は、その心を開くであろう。」³⁾（下線—木村）。

さながら一世紀前に「人民の中へ」と叫んだナロードニキを想起させるトーンにおいてである。（事実、フルシチョフは、在世中のスターリンによって、屢々「ナロードニキ的態度をもち」、「プロレタリア的階級感覚を喪ったナロードニキ」と揶揄・非難された⁴⁾）。

フルシチョフは、エリートたちがたんに「大衆のところへ赴く」だけで未だ十分ではなく、「大衆とともに働かねばならない」と主張した。たとえば、タシケントにおける或る集会（1954. 11. 20）の席上において、彼は、「コルホーズ、МТС、ソフホーズ、労働組合における党ならびにコムソモール組織が、日常的に人々とともに働く（работать с людьми）ことを、自己の第一の義務であると看做すべきである」⁵⁾、と訴えた（下線—木村）。まったく同趣旨を、「最重要な初歩的な課題」（1954. 3. 6）と題する演説の中において、フルシチョフは、つぎのように、繰り返している：

「党の仕事愛することは、すなわち、人々とともに仕事する（работать с людьми）ことを愛し、彼らの関心を識り、コルホーズ農民、МТС やソフホーズの労働者とともにおり、彼らの直面する課題の解決を組織し、彼らが事態を改善するのを助けることを意味する。…大事なことは、これらの仕事を、コルホーズ農民全てとともに、コルホーズ農民グループとともに起こすことである。」⁶⁾（下線—木村）。

しかし、「大衆とともに働く」だけでも、必ずしも充分とは言えないのである。党や政府の専従者たちは、どうしても「大衆に注意を払い」、「大衆と悩みを分かち合う」必要がある、とフルシチョフは考える。たとえば、「畜産物生産の増大について」と題する党中央

3) Пленум Ц.К. К.П.С.С. (19-23 ноября 1962 г.), стр. 64.

4) Н. Хрущев, "За тесную связь литературы и искусства с жизнью народа," (Коммунист, т. 34, № 12, август 1957 г.), стр. 13; 日刊労働通信社編『フルシチョフ言説集』(東京: 日刊労働通信社, 1964), p. 387. なお, Khrushchev Remembers: The Last Testament, p. 113; 佐藤訳, 上巻, p. 126 も参照のこと。

5) Н. С. Хрущев, Строительство коммунизма в СССР и развитие сельского хозяйства (М.: Госполитиздат, 1962), т. 1, стр. 394.

6) Там же, стр. 279. また、フルシチョフは、1957年4月8日にも、同趣旨を繰り返している：「いま大事なことは、人々とともに働くこと（работа с людьми）である。農業技師、動物飼養者、獣医、科学者たちを、もっと広く提起された課題の解決へと引き入れる（привлечь）必要がある。」 Там же, т. 2, стр. 416（下線—木村）。

「公衆主義」の陥穽

委宛て演説 (1955. 1. 25) のなかで、フルシチョフは、説いている：

「コルホーズ農民、MTC とソフホーズに働く労働者は、党務専従者から…彼らと自分の考えや懸念をわかち合い、自己の希望について語り、必要な援助を受けることを、欲しているのだ。人間にたいする不注意は、人間にとって最大の侮辱である。党務専従者が、このことを忘れるところでは、非常に多くの欠陥が生まれる。」⁷⁾ (下線—木村)。

要するに、幹部と大衆の間に信頼関係を打ちたてることが最終目標であると、フルシチョフは、主張してゐないのである。たとえば、全連邦 MTC 労働者集会 (1954. 1. 28) の席上、彼は、つぎのごとく力説した：

「コルホーズ農民が、ひきつづきあなた方 (=地方の党幹部—木村) を信じ、あなた方のすべての言葉を信ずるためには、コルホーズ農民に真実を告げ、彼らを説得することが必要である。」⁸⁾ (下線—木村)。

フルシチョフは、このように共産主義建設という大義のためには、エリートすなわちソ連の用語では幹部 (кадры) が人民大衆へ接近し、彼らと同一化することが必要であると説いた。否、エリートと大衆との同一化ということすら、フルシチョフの基本思想を表現するのに未だ不十分な言葉かも知れないのだ。というのも、フルシチョフは、時として一少なくとも口頭においては、そもそもエリートと大衆との区別そのものを否定しているかに見受けられることすらあるからである。たとえば、以下に紹介するフルシチョフの発言をみてみよう。ロシア共和国農業前衛分子会議 (1954. 2. 15) の席上、フルシチョフは、述べている：

「この会議には、党員ならびに非党員の同志が参加している。党員、非党員のいずれもが、一つの共通の仕事をおこないつつある。それ故に、われわれは、欠陥を明らかにするためには、党専従者も、非党員も、同様に批判するのである。」⁹⁾ (下線—木村)。

II. 「公衆主義」の背景—フルシチョフの狙い—

以上 (I) で、はなはだ不十分とはいえ、一応フルシチョフ「公衆主義」の大体の趣旨や内容が理解されたとして、つぎにその具体的顕現の様子を見る作業 (III) に移る前に、では一体なぜフルシチョフがそもそもこのような「公衆主義」を唱導しようとした (あるいは唱導せねばならぬと考えるにいたった) のかということ、検討したい (II)。フルシチョフによる「公衆主義」提唱の理由は、上述したフルシチョフの発言や主張からもすでに部分的には窺い知りうるのであるが、それだけでは決して充分ではなく、改めて一歩突込んだ客観的な見地からの考察を加える必要があるのである。つまり、以下の独立の小節においては、もちろん、まずフルシチョフをはじめとするソビエト公式説明の説くところに即して、フルシチョフ「公衆主義」を必要とするに至ったソビエト社会の歴史的事情を考える (1)。しかし、それで決して事足りたりとするのではなく、さらにそのようなソビエト文献の忠実な紹介だけでは必ずしも充分露わとなったとはいえないフルシチョフの隠された (?) 動機を、独自の立場からする西側の諸解釈で別決し、補わねばならない (2)。最後に、本稿筆者の私見を付加することにする (3)。

7) Там же, т. 1, стр. 489.

8) Там же, стр. 126.

9) Там же, стр. 192.

(1) ソビエト公式説明。フルシチョフ期において、フルシチョフならびにその意を体するソ連の諸学者が「公衆主義」を正当化したさいに用いた事由は、きわめて簡単明瞭である。すなわち、それは、つぎの三段論法に要約される：〈(a) 大衆との結びつき、ソビエト人民大衆の行政活動への参加は、本来レーニンが強調して焉まない党生活の根本原則であった。(b) しかるに、この基本方針は、まことに遺憾千万にも、スターリンの個人崇拜によって無視され蹂躪されるところとなった。(c) したがって、今やこの弊害を除去・矯正し、本来あるべき姿としてのレーニン主義的「公衆主義」の規範に立ち戻ることが当然かつ肝要である〉。ここには、フルシチョフ主義の他のほとんど全ての主張に共通する構成要素ならびにロジックが見出される。すなわち、すでに少し触れたこともあるが(113ページ)、(自己の存在理由を確保するための)「スターリン主義批判」と「レーニン主義への復帰」という二要素であり、(自分自身にはなんら積極的な権威が存在しないが故に)後者の「錦の御旗」を借りて、前者の作業を行おうとするやり方である。たとえば、党中央機関誌『党生活』(1963. 4月号)に掲載された「党生活のレーニン主義的規範について」と題する IO. ロマーキンの論文は、このような構成要素とロジックの代表的な例といえる。ロマーキンは、まず述べる：

「スターリン個人崇拜の時期においても、地方党組織は、レーニン主義的生活規範にのっとり、存在し活動していたのであって、他のいかなる規範にもとづいていた訳ではなかった。とはいえ、全体としては、この時期は、レーニン主義的規範の深刻な侵犯、その重大な逸脱という特色をもち、党のあらゆる活動の上にまさに否定的なものとなって反映し、党を人民から引き裂き、党の指導的役割を弱体化するという危険に直面していた」¹⁾(強調点—木村)。

しかし、このような弊害のすべては、フルシチョフ期になって見事に矯正されたと、ロマーキンは、つづいて主張するのである。曰く、「最近10年(=スターリンの死の1953年から62年までの10年、すなわちフルシチョフ期—木村)の期間における、わが党の最も重要な活動の側面は、党生活ならびに指導原則のレーニン主義的規範の復活とその一層の発展であり」²⁾、(その結果)「個人崇拜が…弾劾され、…追放された。歴史における人民大衆の決定的役割にかんするマルクス・レーニン主義の命題が完全に復活されている。」³⁾(下線—原文ゴチック；強調点—木村)。

一体、このような三段論法でもって構成されるソビエト公式説明は、客観的妥当性をも併せ主張しうるものであろうか。このことが、つぎに問題となる。まず第一に、それが、「公衆主義」を必然化した要因として、「個人崇拜の弊害」なるフレーズの下にスターリニズムの欠陥を指摘していることは、きわめて当然なこととして首肯しうる。というのも、一般的にいつて、そもそもフルシチョフ登場の存在理由がスターリンのアンチ・テーゼたる点に存したことは紛れもない事実であり、したがって亦、特殊具体的に、フルシチョフ「公衆主義」の提唱事由として、スターリンの選良重点主義の行き過ぎを指弾すること⁴⁾

1) Н. Ломакин, "О ленинских нормах партийной жизни," *Партийная жизнь* —以下において, *П.Ж.* と略称—(№ 7, апрель 1963 г.), стр. 16.

2) *Там же*, стр. 15.

3) *Там же*, стр. 16.

4) G. W. ブレスラウアー教授は、フルシチョフの(大衆)「引き込み(привлечение)」政策が、明確に「反エリート主義(anti-elitist)」の色彩を帯びていた、と指摘する。George W. Breslauer, "Khrushchev Reconsidered," *Problems of Communism* (Vol. 25, No. 5, Sep.-Oct. 1976), p. 24.

は、客観的にも納得しうる事柄だからである。だが、この点について、さらに一言、説明を加えたい。

改めて説くまでもなく、スターリン時代は、急速に国家形成ならびに工業化への「離陸」を遂行せねば、西欧先進諸国から益々立ち遅れるのみならず「社会主義」体制そのものの保持すら危ぶまれる時期であった⁵⁾。この課題を効率的に遂行するために、「上からの革命」、すなわち、一握りの指導者が号令をかけ、社会の残りのメンバーを「動員」⁶⁾するシステムが、半ば不可避免的な選択肢として採択された。そのようなスターリン時代における幹部中心主義⁷⁾は、(明治期日本のばあいと同様⁸⁾)、必要最小限の選良に政策決定を独占的に集中し、残りの大衆からは、統治の対象たる以外のいかなる権利をも剝奪することを意味した。

5) このようなスターリンの危機意識を表したものとして、たとえば、1931年2月4日の社会主義工業活動家第1回全国会議における彼の演説中の、つぎの一節をみよ：「テンポをおさえることは、立ち遅れることを意味する。そして立ち遅れた者は、打ちまかされる。だが、われわれは打ち負かされることを欲しない。否、断じて打ち負かされることを欲しない。」旧ロシアの歴史の面は、ロシアが立ち遅れのために絶えず打ち負かされていたことにある。蒙古の汗に打ち負かされた。トルコの蒙族に打ち負かされた。スウェーデンの封建領主に打ち負かされた。ポーランド＝リトワニアの地主に打ち負かされた。イギリス＝フランスの資本家に打ち負かされた。日本の貴族に打ち負かされた。以上すべての者は、ロシアが立ち遅れていたため、ロシアを打ち負かしたのである。すなわち、軍事上の立ち遅れ、文化上の立ち遅れ、国政上の立ち遅れ、工業上の立ち遅れ、農業上の立ち遅れのためである。彼らが打ち負かしたのは、それが利益があり、なんの罰も受けずに済んだからである。

われわれは、先進諸国に50年から100年立ち遅れている。われわれは、この距離を10年間で走り過ぎなければならぬ。われわれがこれを成し遂げるか、それとも、われわれが押しつぶされるか、である。」И. В. Сталин, *Сочинения* (Москва: Госполитиздат, 1951), т. 13, стр. 38-39.

6) 「動員」(mobilization) の概念ならびにその「近代化」や「離陸」との関係について、Amitai Etzioni, *The Active Society: A Theory of Societal and Political Processes* (New York: The Free Press, 1968), pp. 387-422 参照。ソビエト文献も、「動員化」(мобилизация) の重要性を強調している。

なお、改めて言うまでもなく、この大衆動員という考えは、何もスターリン期のみに限ったことではなく、フルシチョフ期にもひきつづき要請されかつ該当することがらであり、たんにその形態や方式が変化したにすぎないことが、注意されねばならぬ。たとえば、フルシチョフ期の一論説は、「党中央委は、イデオロギー上の作業の主たる考えは、マルクス・レーニン主義理論の説明を大衆の動員化と結びつけるところにある…」(強調点—木村)と述べる。“Дело каждого партийного и хозяйственного руководителя,” *Коммунист* (т. 39, № 10, июль 1962 г.), стр. 68. また、フルシチョフ自らも、「生産の昂揚ならびに完成を目指す闘いのために、何百万という労働者および動員大衆の創造的な力を動員化することにおいて…」(強調点—木村)と述べている。*XX съезд К.П.С.С.*, т. 1, стр. 110. ウィリアム E. オドム教授によれば、(フルシチョフの強調した—木村)「大衆の自発的組織は、動員型 (mobilizational) 政治システムの特徴であり」(William E. Odom, “The ‘Militalization’ of Soviet Society,” *Problems of Communism*, Vol. 25, No. 5, Sep.-Oct. 1967, p. 46), さらにプレスラウアー助教授にいたっては、フルシチョフこそ(大衆)「動員化型リーダー」(the mobilization leader) のモデルである、と極論する。Breslauer, *op. cit.*, p. 24.

7) たとえば、彼の「幹部がすべてを決定する (кадры решают все)」という有名なスローガンを想起せよ。И. В. Сталин, *Сочинения* (Stanford, California: The Hoover Institute on War, Revolution and Peace, 1967), т. 1 (XIV), 1934-1940, стр. 62.

8) ソ連と日本のエリート——とくに「移行 (transformation)」期における——の類似性について、Cyril E. Black *et al*, *The Modernization of Japan and Russia: A Comparative Study* (New York: The Free Press, 1975), p. 269 参照。

その結果、スターリンの死までに、治者と被治者との間に劃然たる断絶が存在する階層社会が現出した。たとえば、ほんらい平等を志向すべき「社会主義」社会において「主人(хозяин)」なる用語が復活した⁹⁾。地方の党書記たちは自らを「地方の主人(хозяин района)」¹⁰⁾と看做し、他の平党員の意見に耳を傾けず¹¹⁾、単独に問題を決定する¹²⁾、等々の「地方の指導者主義(местный вождизм)」¹³⁾—すなわち、P. コックスによれば「小型スターリン(a little Stalin)」¹⁴⁾—現象が、跋扈した。しかるに他方、これらの「深刻な欠陥」¹⁵⁾をチェックすべき肝心のレーニン流(?)の「下からの大衆コントロール(из-под контроля масс)」¹⁶⁾制度は、その本来の機能をまったくといってよいほど発揮しえなかった。たとえば、レーニン期に統合・強化された党-国家統制委員会¹⁷⁾は、1934年、スターリンによって分割・改組され¹⁸⁾、「事実上、大衆との結びつきのない高度に官僚主義的な性格のもの」¹⁹⁾に変えられた。П. З. Мэфрис・ソ連邦国家統制大臣は、同省内に働いていない外部者を、同省の統制機関のチェックに参加させるべく引き入れることを、弾固として禁ずる命令を出したが²⁰⁾、その頃既に「公衆の積極分子や援助グループを動員するといふ旧いおしゃべりは、どこへでも好きなところへ消え失せるがよい!!」²¹⁾という A. O. ヴィンスキー(=長らくスターリン主義的司法制度の忠実な代弁者兼護持者)の言葉が、スターリン期の支配的見解となっていた²²⁾。

- 9) Б. Борисов, “Партийная демократия и воспитание кадров,” *П.Ж.* (№ 8, 1956), стр. 20.
 10) *Там же*.
 11) たとえば、アルハンゲリスク地方委員会では、地方委員会総会や積極分子の会合の後においてすら、アパラチキを招集せず、…そのうえ、1年半以上もの期間にわたって、書記が部局の長たちを招集して、彼らとアパラチキの活動にかんして話し合うことが、なかった。“Повышать организаторскую роль партийного аппарата,” *П.Ж.* (№ 5, 1955), стр. 12.
 12) Борисов, *там же*, стр. 20.
 13) *Там же*.
 14) Paul Cocks, “The Rationalization of Party Control,” in Chalmers Johnson (ed.), *Change in Communist Systems* (Stanford, California: Stanford University Press, 1970), p. 168.
 15) “Повышать …,” стр. 8; *XII съезд коммунистической партии советского союза (17-31 октября 1961 года) (стенографический отчет)* (М.: Госполитиздат, 1962), т. 1, стр. 117.
 16) Ломакин, *там же*, стр. 16.
 17) レーニンは、それぞれ 1920 年と 1921 年に設置された「労働監督人委員部」(Рабоче-крестьянская инспекция)と「党中央統制委員会」(Центральная контрольная комиссия)とを、1923 年、合併して「党—国家統制委員会」(Центрально-контрольная комиссия и рабоче-крестьянская инспекция)を造った。
 18) スターリンは、いわゆる「勝利の大会」たる第 17 回党大会(1934. 1. 26-2. 10)において、党—国家統制委員会を、「党中央委付属党統制委員会」(Комиссия партийного контроля при ЦК ВКП(б))と「ソ連邦人民委員会議付属ソビエト統制委員会」(Комиссия советского контроля при Советнаркомме СССР)に分割した。
 19) Cocks, *op. cit.*, p. 164. フルンチョフは、1962 年 11 月 19 日の党中央委総会の席上、「党—国家統制組織のレーニン主義的原則は、スターリンによって重大なまでに侵害された」と述べた。*Пленум Ц.К. К.П.С.С. (19-23 ноября 1962 г.)*, стр. 84.
 20) Е. Бугаев. “《Эта самая для нас интересная политика …》,” *Правда* (26 декабря 1962 г.), стр. 3 から再引用。
 21) Н. Миронов, “Укреплять законность и правопорядок,” *Правда* (8 мая 1964 г.), стр. 2 から再引用。
 22) Cocks, *op. cit.*, p. 164.

ところが、1953年、30年間にわたるかような形での「動員」システムの総司令官たるスターリンが、ソ連社会から忽然として姿を消したとき、人民大衆の間に長年うっ積されていた不平・不満は、まさに限界点に達しようとしていた。このような状況に直面し、尚かつこれまでの如き彼らの物心両面における犠牲と疎外を強い続けることは、きわめて困難かつ同時に危険なことであった。かくて、ここに指導者の交代を機に、なんらかの戦略の転換が必至となったのである。たとえ独創的なイデオログとはいえないにせよ、社会の趨勢ことに大衆の潜在的欲求の触知能力にかけては決して人後に落ちることのないフルシチョフが、このようなソビエト人民の志向や感情の動きに気付かぬはずはなかった。(そして、まさにこの点にこそ、紛れもなく、フルシチョフが、他の強力なライバルに先駆けて、クレムリンのトップ指導者の地位へ急上昇した理由の一端が求められる²³⁾)。つまり、彼は、その動物的ときえいえる独特の嗅覚により、スターリンの幹部中心主義を改め、たとえ擬似的であれ、なんらかの意味での人民参加の幅を広げる方策を導入せざるをえない事態の深刻性を悟ったのである。

では、いかにして、このように今や必須となった政策転換を遂行すべきか?—これが次の問題となる。まず、たとえばスターリンの死の時点において、後継者順位 No. 5 でしかなかった²⁴⁾フルシチョフその人に、かような大転換を正当化する個人的権威もカリスマ²⁵⁾も備っていなかったこと、改めて指摘するまでもない。さらに重大なことには、フル

23) 『ニューヨーク・タイムズ』元モスクワ特派員で恐らく米国のもっとも優れたソ連通ジャーナリストたるハンソン・ソルスベリーは、フルシチョフ期(1959年)のソ連訪問記(1960年刊)の中で、フルシチョフが、彼のライバルと比べ、民心を捉むのに敏であり、その特殊才能こそが、彼をスターリンの後継者の地位へ押し上げた要因に他ならないと説明する、ソ連の一新聞記者のつぎの言葉を紹介している。すなわち、「『あなたがたは、(フルシチョフの抬頭を—木村)フルシチョフの身につけた才能、つまりライバルたちを片づけるのに成功したせいだとみている。換言すれば、かれの抜け目なさによる個人的勝利とみている。わたしは、これほど見当ちがいないことはないと思う。たしかに、フルシチョフは有能だ。だが、有能な人はほかにもワザといた。フルシチョフが指導的地位へのしあがったわけは、かれがいまのソ連国民の気分と志望を真によく集約しているためだ。かれの計画は民衆の支持する計画なのだ。』この男の考えでは、一と、ソルスベリーは、解説している一能力のちがいが問題なのではない。マレンコフも、モロトフも有能で、経験にとむ政治家である。フルシチョフにまけぬほど、策略にたけていた。ちがいは、フルシチョフのほうがソ連国民とところを通わせる優れた能力をもっており、民衆の願いを鋭敏に感じて、それを具体的な計画や行動に結晶できる点にある。その男はこうもいった。『だれかべつの男がなにかちがう計画をひっさげて登場したとしても、長続きしないと思う。国民は支持しないだろうからだ。』フルシチョフとソ連国民の関係、ここるところの自由なつながりを研究し、国民の実際の目標や望みを調べてみればみるほど、この新聞記者の主張が正しいと確信しないわけにはいなくなる。フルシチョフは、一と、ソルスベリーは、さらに説明している—いわば時代によって押し出された人である。マルクス主義者にいわせると、歴史的過程によって押しだされた人だ。こうして押しだされて、チャンス用最善の形で利用すると、こんどはかれ自身がこの時代に自分の性格から放出する特定の色彩と個性を付与しているのである。」(強調点すべて—木村)。Harrison E. Salisbury, *To Moscow—And Beyond* (New York: Harper and Brothers, 1960), pp. 160-161; 原子林二郎訳『フルシチョフのソ連』(東京:時事通信社, 1960), pp. 196-197。また、メドベージェフ兄弟も、「フルシチョフの抬頭は、象徴的な意義をもっていた。すなわち、それは、永年にわたって農村に育ちつつあった不満と絶望すらの感情を緩和したのだ」と書いている。Roy A. Medvedev, Zhores A. Medvedev, *op. cit.*, p. 6.

24) Roy A. Medvedev, Zhores A. Medvedev, *op. cit.*, pp. 3-4.

25) 四代にわたる歴代のソビエト指導者の各々のカリスマ的資質の比較・検討として、Teresa Rakowska Harmstone, "Toward a Theory of Soviet Leadership Maintenance," in Paul Cocks,

ンチ ョフは、つぎのようなむつかしい課題にも直面していた。すなわち、もし彼がスターリニズム批判を論理的に徹底しておこなおうとするならば、ほどなく彼自身も拠って立つ権力基盤や体制全体を掘り崩すこととなるであろう²⁶⁾。では、いかにすれば、スターリン批判を行い且つ同時に右のような危険をも回避することができるだろうか？ このジレンマを解決するには、「レーニンの外套を纏って、スターリン主義路線から離脱すること」²⁷⁾、より端的に言えば、〈スターリンが本来あるべきレーニン主義から逸脱した〉と説く以外にはないと思われた。かくして、フルシチョフのほとんど全ての政策（たとえば、平和共存²⁸⁾、物質的刺戟の原則²⁹⁾、等々）が、（フルシチョフ本人ではなく）“ソビエト社会主義の父”レーニンの揺ぎなき威光を借りて、ジャスティファイされることとなったのである。

以上が、フルシチョフ期におけるソビエト公式説明が、（フルシチョフ）「公衆主義」をも「レーニン主義的規範への復帰」として唱導した事情である。さらに、ここで一言註解を付けるべきは、このようなフルシチョフのお家の事情を理解することと、レーニン自身が「公衆主義」者であったと承認することとが、全く別箇の二つの事柄であることである。というのも、レーニン自身が、その当時、実際にどのていど真剣に「人民参加」の可能性を考えかつ実施したか——このことは、歴史的事実として大きな疑問符の付せられることがらだからである。もしレーニンの発言を、枝葉末節に拘泥せず、相対的重要性の原則に従い、総合的に判断するならば、レーニン主義の真骨頂は、あくまで前衛主義に求められ、人民大衆にたいしては副次的な役割しか与えなかった、と把握すべきであろう。これが、少なくとも本稿筆者の理解なのである。ところが、左様なレーニンの真意は、訓話学者や銜学者にでも任せておくべき瑣末事であり、フルシチョフを始めとする国家経論の担当者たちが拘泥すべき事柄ではなかった。なぜなら、後者の職種の人々にとって重要なことは、自己の支配の正統性の強化・補充に役だつもの全てを掻き集め、利用し尽くすこ

Robert V. Daniels, Nancy Whittier Heer (eds.), *The Dynamics of Soviet Politics* (Cambridge, Mass.: Harvard U.P., 1976), pp. 54-57 参照。また, Hammer, *op. cit.*, p. 4 も参照。

- 26) スターリニズム批判を手加減することなく推進してゆくと、スターリン個人の範囲を超えソビエト型社会主義体制の問題に行きつくことを、社会主義陣営内部の中で指摘したのは、言うまでもなく故トリアッチであったが (Polmiro Togliatti, "9 Domande sullo Stalinisms," in *The Russian Institute, Columbia University, ed., The Anti-Stalin Campaign and International Communism*, New York: Columbia University Press, 1962, pp. 120-121, p. 128), フルシチョフ政権は、スターリニズムの弊害をあくまでスターリン個人に帰し、体制との関連をキッパリ否認した。"О преодолении культа личности и его последствий," *КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК* (часть IV) (Москва: Госполитиздат, 1960), стр. 231 ff.
- 27) Howard Swearer, "Bolshevism and the Individual Leader," *Problems of Communism* (Vol. 12, No. 2, Mar.-Apr., 1963), p. 93.
- 28) *XX съезд коммунистической партии советского союза* (стенографический отчет) (Москва: Госполитиздат, 1956), т. 1, стр. 34. なお、レーニンと平和共存との関係について、寺谷弘壬「ソ連外交とマルクス・レーニン主義—平和共存の戦術と戦略—」(国際情勢研究会), pp. 6-7; Albert L. Weeks, *The Troubled Détente* (New York: New York University Press, 1976), pp. 6, 8-10, 35-37, 40-41, 58-60 参照。ブレジネフ期になっても、平和共存がレーニンによる創造とされる点は、全く変化していない。たとえば, А. О. Чубарьян, *Мирное сосуществование: теория и практика* (М.: Политиздат, 1976), стр. 4 参照。
- 29) 前掲拙稿「移行期としてのフルシチョフ期 (その一)」, p. 135 参照。

とでしかなかったからである。

そして、このようなマキャベリスト達の仕事をさらに一層容易にしてくれたのは、レーニンがこのうえもなく重宝な魔法の玉手箱を遺してくれたことであつた。つまり、『レーニン全集』50余巻中には、彼のありとあらゆる³⁰⁾種類の発言が収蔵されているのだ。それらの発言は、実際は、レーニンが、それぞれ異なった状況で語った言葉であり、時として前言と矛盾するどころか全く対立さえする筈のものである。しかし、もし関係文脈を無視しているという一部の術学者(?)的の非難さえ気にしなければ、それは、一般に誰にとっても、自己に都合のよいレーニンの語句を見付けだすのにさして苦勞しない文字通りの「宝庫 (treasury)」³¹⁾ (F. バグホーン) なのである。だからして、海千山千のクレムリン指導者が、この教典に準拠して、自己が採用する時々路線に合致するお好みのレーニン像を自国民や全国民に演出・提示してみせることは、彼らにとって、朝飯前の芸当なのだ。

ともあれ、このような『レーニン全集』中から、レーニンが「公衆主義」を唱導していた根拠として最も頻繁に引用されるのは、つぎの一節である：

「われわれは、空想主義者ではない。どんな雑役夫でも、どんな炊事婦でも、すぐさま国家統治に参加する能力があるわけではないことを、われわれは知っている……しかし、われわれは、あたかも金持や、金持家族出身の官僚だけが、国家を統治し、日常の、日々の行政活動を遂行することができるように考える偏見と、既座に手を切ることを要求する点で、これら(カデットなど一木村)の諸君と異なっている。われわれは自覚した労働者や兵士たちが、国家行政の仕事の学習をおこなうこと、この学習がただちにはじめられるべきこと、すなわち、すべての勤労者、貧民全体を、ただちにこの学習へ引込む(привлекать)ことを開始するよう、要求する。」³²⁾ (下線—原文ではイタリック)。

1900年すなわちまだ1905年革命すら予測されていなかった時期におけるレーニンのこのような発言は、元来政権奪取前のかくあるべしとの理想の吐露ないし宣伝的キレイゴトの表現と看なすべき類のものであろう。しかし、なん度も繰り返すように、フルシチョフを含むレーニン以後のソビエト指導者にとって、レーニンの真意はまったく問題でなかった。このような断片的なレーニンの発言によっても、レーニンが「人民の国家行政・管理への参加」を積極的に唱導していたということが窺われ、そのことによってフルシチョフの「公衆主義」がレーニン主義の訓えに沿うものであることが(一たとえいかに強引に見えようとも)主張されれば、それで目的は十分達成されたのである。たとえば、フルシチョフ作製『党綱領』の中における「何百人という新しい勤労者たちに国家統治の経験を習得させ…、ますます広範に才能ある人々を指導機関に引きこむこと(привлечение)」³³⁾ (下線—原文ゴチック)の必要性を説いた部分などは、上に引用したレーニンの発言とリンクされることによって、いかにその権威とPR効果を増大させることか、想像に余りうる。

30) 最近のソ連では、レーニンによって用いられた「あらゆる語句を包含する」全五巻からなる辞典編纂の事業が開始されたという。The Christian Science Monitor (Jan. 22, 1975).

31) Frederick C. Barghoon, "Prospects for Soviet Political Development: Evolution, Decay, or Revolution?," in Kurt London (ed.), The Soviet Union: A Half-century of Communism (Baltimore, Maryland: The Johns Hopkins Press, 1968), p. 83.

32) Б. И. Ленин, Полное собрание сочинений (издание пятое)—以下 Собрание と略す—(Москва: Политиздат, 1962), т. 34, стр. 315.

33) Программа коммунистической партии советского союза (Москва: Политиздат, 1968), стр. 102.

部分的にはこのように甚だ得手勝手な牽強付会も見られるが、〈レーニン主義的規範への復帰〉という項目をたんなる正統性強化の手段と理解し³⁴⁾、あくまで〈スターリン個人崇拜の弊害の矯正〉のほうをより重視するならば、〈スターリン個人崇拜の弊害を矯正し、レーニン主義的規範に復帰する〉という、ソビエト公式説明によるフルシチョフ「公衆主義」の正当化事由は、大筋において承認してよいと思われる。——序でながら、このようなことは、ソビエト公式説明が、通常そのホンネや実態からいちぢるしく懸け離れた虚偽のこじつけしか提供しないことを思いあわせるならば、稀有のケースではある。とはいうものの、それは余りにも大まかな説明であり、以下われわれがおこなうがごとく、われわれ独自の視角から具体的にさらにもう一段掘り下げてみる必要と努力を些かも減ずるものではない。

(2) 西側の解釈。ここでは、主従ところを変える、すなわち西側の見解を中心とし、それをソビエト側の発言で裏づける手法により、ひきつづき、フルシチョフ「公衆主義」を要請した諸事由を探ることにしよう。

① 西側の観察者たちは、第一に、フルシチョフによって提唱された「公衆主義」が、ハッキリした官僚主義批判³⁵⁾であり、裏を返せば〈反エリート主義³⁶⁾〉の謂に他ならない、と解釈する。つまり、フルシチョフは、(上に説明したごとき)スターリン時代に過大なまでに肥大化し特権階級化した少数エリート・グループが生み出す諸欠陥を矯正するいわば切り札の役割を、「公衆」に担わそうと思考したのではないか。といっても、その際、人民大衆がそのような大役を実際に遂行しうるか否かは、さして問題ではない。けだし、フルシチョフにとってまず何よりも必要なのは、官僚主義退治キャンペーン遂行のための旗印(ないし隠れ蓑)であって、必ずしもその現実の担当者ではないのだから。——この意味において、フルシチョフの「公衆」は、マルクス、レーニン、スターリンによってプロレタリアート革命の担い手に祭り上げられ利用された「幻の——つまり、当時のドイツやロシアは未だ形成されていなかった——階級」たる「革命的プロレタリアート」ときわめて似かよった³⁷⁾、あるいは、それに代る象徴的存在と考えられる。

それはともかく、フルシチョフが、既述のように(115 ページ)エリートと大衆との間の

34) T. ラコフスカ、ハームストーンによれば、フルシチョフならびにその後継者にとり、「レーニン主義の創始者の神話のリバイバルは、正統性と連続性を回復する努力の中で、最優先権を受ける。」Rakowska Harmstone, *op. cit.*, p. 55.

1) たとえば、William J. Conyngham, *Industrial Management in the Soviet Union: The Role of the CPSU in Industrial Decision-making, 1917-1970* (Stanford, California: Hoover Institution Press, Stanford University, 1973), p. 83; Richard Lowenthal, "Development vs. Utopia in Communist Policy," in Chalmers Johnson (ed.), *Change in Communist Systems* (Stanford, California: Stanford University Press, 1970), p. 95. 『ソ連共産党綱領』(1961)自身、「公衆主義」の狙いが「官僚主義」(бюрократизм) 退治にあることを隠そうとはしていない。Программа К.П.С.С., стр. 104-105.

2) George W. Breslauer, "Khrushchev Reconsidered," *Problems of Communism* (Vol. 25, No 5, Sept.-Oct. 1976), p. 24.

3) つまり、両概念は、夫々、決してマルクスやフルシチョフの「プロレタリア階級」や「公衆」に対する同情や共感から生れたものではなく、革命や反エリート主義キャンペーンの担当者を探索した結果、いわば発見された存在という意味において似かよっている。猪木正道『共産主義の系譜—マルクスから毛沢東まで—』(東京:角川書店, 1970), p. 30 参照。

区別の不要性やその一体化すらを主張した訳も、元はといえば、彼が大衆という味方の力(ないし名義)を借りてエリートの増長ぶりを押えようと欲したからに他ならない。たとえば、既引用の(115 ページ) ロシア共和国農業前衛分子宛て演説中で、フルシチョフが、これからは、「非黨員」(つまり「大衆」)も、「黨員」や「党専従者」(つまり「エリート」)も、均しく批判の対象となりうると宣言したとき、彼の脳中にあった主たる攻撃目標が、決して前者ではなく後者に向けられていたことは、改めて強調されるまでもなからう。必要とあれば、この〈敵は、むしろ本能寺〉の解釈をさらに動かし難くする証拠を、挙げる事ができる。フルシチョフによるレニングラード農業労働者宛て演説(1955. 4. 12)中の全く同趣旨のつぎのくだりが、そうである。フルシチョフ曰く、：

「ここには、共産黨員非黨員が出席している。しかし、私は、非黨員が在席しているところで、党の地区委員会宛ての批判をおこなうことにする。黨員と非黨員にとって、課題は一つ、すなわち、農業ならびに蓄産の水準を向上し、すべての種類の生産物を、短期間で国民に保障し、原料を工業に確保することなのだから。」⁴⁾(下線—木村)。

つまり、ここに明確に表明されているのは、フルシチョフが、すでに1955年の段階において党の卒伍メンバーや非黨員大衆の尊重という名目の蔭に隠れて、党専従者や専門官僚の牽制・コントロールを企図していた事実である。

このように、フルシチョフ「公衆主義」が〈人民大衆の広範な行政への参加〉と〈エリートの監督・チェック〉とをワン・セットとしていることは、1961年の(フルシチョフ)『党綱領』の中に、もっとも明瞭に看取される。すなわち同『党綱領』を採択するよう提案した第22回党大会の席上、フルシチョフは、「無気力に、イニシアティブを発揮せず働き、自己の企業ないし地方、州ないし共和国の立ち遅れに慣れてしまった指導者たち」⁵⁾、「国家の負担で生活することの好きな要員」⁶⁾、「慢心した指導者たち」⁷⁾等々を槍玉にあげ、「党、国家、そして公衆的コントロール」⁸⁾の重要性を指摘するとともに、そのコントロール強化の決め手としての「大衆との結びつき」⁹⁾、「広範な大衆の積極的な参加」¹⁰⁾を強調したのだった。そして『党綱領』そのものも、

「党は、人民コントロールを、国家業務の管理ならびに法の厳守のコントロールの実現に広範な人民大衆を引入れるための効果的な手段、…また官僚主義を根絶する…手段とみなしている。」¹¹⁾

と宣言し、具体的には、「信頼に値しない代議員をリコールする選挙人の権利」¹²⁾、「指導的機関の構成を定期的に変更する必要」¹³⁾、「最重要法案を、全人民投票(レフェレンド

4) Хрущев, там же, т. 2, стр. 115; p. 115 に引用のモスクワ農業前衛分子会議におけるフルシチョフの同趣旨の発言も参照のこと。

5) XX съезд коммунистической партии советского союза (стенографический отчет) (Москва: Госполитиздат, 1962), т. 1, стр. 115.

6) Там же.

7) Там же, стр. 116.

8) Там же, стр. 117.

9) Там же.

10) Там же.

11) Программа К.П.С.С., стр. 104.

12) Там же, стр. 103.

13) Там же, стр. 102-103.

ム) にかけるべきこと」¹⁴⁾、「合法性と法秩序の遵守を監視し、職権乱用を許さず、それと闘うソビエト人の義務」¹⁵⁾、等々を、強調したのである。

(2) 西欧のソビエト専門家たちは、フルシチョフ「公衆主義」の以上のような反エリート主義的性格が、実務的・経済的要請にも亦応える類のものであったことを指摘する¹⁶⁾。というのも、党、ソビエト、その他大衆組織に無給の積極分子を参画せしめることは、たんに、素人による代替性を示唆することにより、とかく弛みがちな専門官の職務遂行をチェックし、叱咤激励する機能を果すばかりではない。それは、自発的な労働力により、増大する一方の有給専従幹部の数と負担を軽減しカバーすることを通じて、国庫支出を最小限に押えるという経済的必要性にも適うものであったからであった。このような意図は、つぎのような述べ方をするフルシチョフ『党綱領』からも、明瞭に看取しうるであろう。すなわち、『党綱領』は、まず「ソビエト・アパラートは、簡素で、適格性があり、廉上り(дешевый)、機動性のあるものでなければならぬ」¹⁷⁾(強調点—木村)と述べた後、つぎのように提案しているのである：

「有給の国家アパラートを縮小し、もっと広範な大衆が管理の技能をマスターし、将来こうしたアパラートの仕事が特別の職業であることを薦めるようにする必要がある。」¹⁸⁾(強調点—木村)。

また、同じく第22回党大会(1961)で採択された『党規約』も、「ますます多くの共産党員を、専門有給スタッフ外の就労者の資格で、公衆的活動としての党務に引き込むこと」¹⁹⁾を強調した。

(3) 第二点と関連して、第三に重要なことは、フルシチョフ「公衆主義」によって人民大衆に期待された役割が、たんにエリートの牽制や代行という消極的機能のみに尽きるものでなかったことである。換言すれば、フルシチョフは、ソビエト民衆が、以下説明するような意味合いで、社会の傍役でなく、むしろ主役すら演ずることを望んでいたフンがあるのだ。

やや繰り返しになるが、スターリンの死までのソ連邦において、急速な工業化の「離陸」期はほぼ終了し、したがって元来この課題遂行のための効率的な手段として採用された「上からの革命」戦略の扇の要、即ちスターリンによるカードル重視政策は、その有効性を喪い、むしろ新しい発展のための制約要因に転化していた。フルシチョフは、このような時代の転換を鋭敏に察知した。他方、長年のあいだ決定参加や報償配分から全く排除されていた大衆の不満はうっ積し、適当な捌け口を求めていた。工業化をさらに一層推進するためには、大衆の欲求をひきつづき抑圧するよりも、むしろこれを適当に満足させる方がはるかに得策なのではないか。否、得策どころではない、大衆の「下からの」イニシアティブや創造性を積極的に吸い上げてゆくこと以外に、もはやソビエト社会のより一層

14) Там же, стр. 104.

15) Там же, стр. 105.

16) たとえば, Conyngham, *op. cit.*, p. 83; Cocks, *op. cit.*, p. 167.

17) Там же, стр. 104.

18) Там же, стр. 105.

19) Программа и устав К.П.С.С. (Москва: Политиздат, 1964), стр. 268; П. Пигалов, "Общественные начала в работе партийных органов," *Коммунист* (т. 39, no. 7, май 1962 г.) стр. 60.

「公衆主義」の陥穽

の発展の途は存在しないのだ。たとえば、フルシチョフ自身、早くも1958年、彼がスターリンから受け継いだ時期におけるソビエト青年層の不気味な受動性について、つぎのような鋭い観察を示し、その対策の必要を提言していた：

「青年共産同盟組織における生活は、地方からの、本当に沸騰するようなイニシアティブが伝わってこなければならない。そうなれば、全ての者に興味深いものが見つかり、若者たちは、青年共産同盟組織が退屈だと不平を唱えることはなくなるだろう。ところが、現在、そのような不平を、実にしばしば耳にするのだ。」²⁰⁾

フルシチョフがその卓抜な直観力によつて的確に察知した以上のごとき時代の転換ならびに要請を、西側の社会科学者の用語で説明し直すならば、つぎのようなことになる。すなわち、K. ジョーヴィットによれば、彼のいう「レーニン主義的体制」の歴史は、そのエリートに課せられた中心的課題という見地から、少くとも三つの発展段階に分けることができる²¹⁾。第一段階は、「旧社会の変形 (transformation)」²²⁾が最大の課題の時期で、ソ連史を例にとるならば、レーニン期がこれに該当する。第二段階は、「革命体制の強化 (consolidation)」²³⁾が主要任務となる時期で、スターリン時代がそうである²⁴⁾。そして、第三段階として、「大衆の包摂 (inclusion)」²⁵⁾の時代が訪れる。この第三段階の特色は、体制 (= 党アパラチキ) — 社会 (= 卒伍黨員ないし非黨員大衆) 間の構造的関係を再検討して、「敵対 vs. 和解」ないし「離隔 vs. 統合」²⁶⁾を両極とするスペクトルムの中間に、適当な形の新しい「対立緩和 (conflict-accommodation) パターン」²⁷⁾を見出そうと模索する点に求められる。ジョーヴィットのやや難解・抽象的な表現を噛みくぐると、要するに、この第三段階においては、「党エリートが、体制の政治上、生産上の政策決定システムの内的境界を拡大し」²⁸⁾、「官僚 (つまり、アパラチキ) 以外の社会のセクター」²⁹⁾すなわち「以前においては、排除され、信用されていなかった人々の部分」³⁰⁾にレスポンドする必要を承認し³¹⁾、「彼らを、(党エリート) 自身から離隔するよりは、むしろ党エリートと統合し」³²⁾ようと試みがなされるのである。ともかく、このような課題をもつ第三段階が、ソ連においては³³⁾、「1950年代末ないし60年代はじめ頃」³⁴⁾、即ちまさしくフルシチョフ最盛期に

20) Хрущев, *там же*, т. 3, стр. 170.

21) Kenneth Jowitt, "Inclusion and Mobilization in European Leninist Regimes," *World Politics* (Oct., 1975), pp. 69-96.

22) *Ibid.*, p. 69.

23) *Ibid.*

24) *Ibid.*, p. 76.

25) *Ibid.*, p. 69.

26) *Ibid.*, p. 74.

27) *Ibid.*

28) *Ibid.*, p. 69.

29) *Ibid.*

30) *Ibid.*, p. 72.

31) *Ibid.*

32) *Ibid.*, p. 69.

33) ルーマニアにおいては、1965-1968年、ユーゴスラビアやハンガリーでは1966年、そしてチェコスロヴァキアでは1967-1968年に、このような課題ならびに体制構造上の再定義が発生したと、ジョーヴィットは見ている。*Ibid.*, p. 74.

34) *Ibid.*, p. 73.

始まったと、ジョーヴィトは説明しているのである。

④ 第四に、西側の専門家たちは、フルシチョフ「公衆主義」提唱の背後に隠された動機として、それがテロに代るより巧妙な〈コントロール・メカニズム〉³⁵⁾を提供しうる点を、決して見逃さない。たしかに、一と彼らは、説く—フルシチョフは、スターリン時代の主としてテロに代表される、厳しい人民抑圧の諸現象を糾弾しはした。だが、ポスト・スターリン期のソ連も、(—凡そいかなる時期のいかなる社会がそうであるように³⁶⁾—、被治者大衆をコントロールするなんらかの手立てなしには済まされない。しかも、そのコントロール手段が、能率的、エコノミカルなうえに、極力、人民の反感を買わない類のものであることが望ましい。ここにおいて、フルシチョフが思いついたのが、元来レーニン主義思想のなかに存在していたとはいえ、その前衛重視の蔭に埋没してしまった公衆的コントロールの思想を復活・活用(そして変形?)することであった。長らくなおざりにされてきた「公衆(общественный)コントロール」³⁷⁾が導入されねばならない必要を、フルシチョフは、第22回党大会(1961)の席上、以下のように説いた:

「最近までに、ソビエト・コントロール委員会の仕事に、大きな欠陥が生じてきている。なによりもまず、それは、生活、大衆との結合が弱かった。広範な大衆の積極的参加なしに、彼らの助けなしに、国家的なコントロール諸機関の仕事を建設することは出来ないのだ。」³⁸⁾

フルシチョフが強調するのも無理はない、「全人民(всенародный)コントロール」³⁹⁾方式は、統治する側にとって、以下のようなメリットをもっているのだ。(デメリットについては、後述)。第一に、「イデオロギー上の正統性」⁴⁰⁾を充足するという利点がある。すなわち、「人民の名における」統制であるからして、“人民自治”という民主主義的要請に見事に適う。フルシチョフも、第22回党大会で、この点を力説している:

「党、国家、公衆コントロールのシステムは、真に民主主義的原則の基礎にもとづく共産主義建設の指導の完全化の強力な手段である。」⁴¹⁾(強調点—木村)。

35) Paul Cocks, "The Rationalization of Party Control," in Chalmers Johnson, *Change in Communist Systems* (Stanford, California: Stanford University Press, 1970), p. 167.

36) たとえば、スターリン期においては、П. カガノヴィチが、スターリンの態度を、つぎのように代弁していたという:「いかなる人間といえども、…もしコントロールの完全でない状態に置かれ盲目的に信用されるとするならば、墮落すること必定であろう。理想的な人間、欠陥のない人間なんて存在しないのだ。」Cocks, *Ibid.*, p. 187. また、フルシチョフ期においても、同様に主張された:「コントロールは、正直な人間にも、空気のように必要である。なぜならば、彼を誤ちから予防し、足を踏みはずさないようにし、前進させるからである。」“Передовая: Совершенствовать партийный, государственный и общественный контроль,” *П.Ж.* (№ 9, май 1962 г.), стр. 6. さらに、フルシチョフ自ら、いかにレーニンがコントロールということを重視したかを強調している:「В. И. レーニンは、あらゆる形態のコントロールに大きな意義を与えた。」*XX съезд К.П.С.С.*, т. 1, стр. 117. さらに又、ブレジネフ期においても、全く同趣旨の認識が続いている。たとえば、同様に『党生活』誌の論説に曰く:「系統的かつ根本的なコントロールは、誤ちや失策を予防し、人々をコンスタントに創造的な緊張状態におき、のんびり、のんき、高慢の余地をなくする。」“Доверие и требовательность,” *П.Ж.* (№ 2, 1969), стр. 3.

37) *XXII съезд К.П.С.С.*, т. 1, стр. 117.

38) *Там же.*

39) *П.Ж.* (№ 9, май 1962 г.), стр. 6.

40) Jeremy R. Azrael, "Is Coercion Withering Away?," *Problems of Communism* (Vol. 11, No. 6, Nov.-Dec., 1962), p. 12.

41) *XXII съезд К.П.С.С.*, т. 1, стр. 118.

「公衆主義」の陥穽

第二に、公衆コントロールは、実務上の経済的利益をもたらす。自発的な「人民による」無償行為の動員化であるからして、廉上りこの上ない⁴²⁾。それが成功すればするほど、有給職員のこれ以上の膨脹を抑えるところか削減することさえ可能となり、国庫負担を著るしく軽減できるメリットをもつ。この経済的理由を離れては、恐らく、同じく第22回党大会におけるフルシチョフの次の発言の真意を、理解できないだろう。

「わが国においては、社会主義国家の公衆的自治への変形過程が、進行している。…實際上、これが意味するのは、たとえば、(有給の一木村)党機関アパレートが不断に縮小する一方、(無給の一木村)党積極分子の隊列が増大するということである。」⁴³⁾

これらの二点のメリットにかんしては、「公衆主義」一般のもつ強味として、既述した(たとえば、122-124 ページ参照) ところとも重複するので、これ以上詳述することを差し控える。

むしろ紙数を割くべきは、公衆コントロールによって齎される、つぎのような第三の政治上のメリットである。それは、まず、他の方法に比べ、より効果的に、人民の側からの積極的な協力を引き出す、——いやより正確に言えば——強要することができる。けだし、先ず、公衆コントロールは、いやしくも「人民の名において」なされるが故に、被治者人民の側には、この統制活動にたいする参加を拒む口実が前以ってほぼ完全に奪われることになるからである。つまり、公衆コントロール制によって、治者の側は、人民がたんなる体制の受動的支持者ではなく、能動的な協力者となることを免れ難くする。フルシチョフは、社会全体の仕組みについてつねに慮るべきという、このようなソビエト社会の全構成員に課せられた、責務にかんし、同じく第22回大会の席上、つぎのように説明している：

「優秀な機械工が、巨大な機械の生命と動きに敏感に耳を傾け、辛うじてとらえられる響きによって故障に気付くように、また機械の停止を導くあらゆる細事を見てとるように、われわれ全員が、毎日、毎時、巨大なソビエト国の生活の脈搏に耳を傾け、官僚主義や渋滞の現象を根絶し、成功裡の前進運動の妨げとなる全てのものを、われわれの途上から、事前に見てとり排除するよう義務づけられている。」⁴⁴⁾ (強調点一木村)。

つぎに、もしも、一旦成功裡に、このような体制の手先ないし「積極的な共犯者」(J. アズラエル)⁴⁵⁾と転化されたばあい、「人民による」コントロールは、いかなる能吏といえども及ばない効果を発揮することになる。なぜならば、それは、住いや職場を共にする⁴⁶⁾

42) このような「政治権力のエコノミックス」の観点の重要性について、筆者は、つぎのように書いたことがある：「いかに強力苛烈な強制手段であろうとも、常時これを使用すれば、人間はなにごとにも慣れる動物であるからして、その効果は、必ずや激減するものである。それを補完しようとしてさらに大きな強制が要求され、その悪循環は天井知らずの膨脹の一路を辿り、終局的には国民一人に警官一人をつけるにいたっても未だ不十分であろう。このようなたえず戒厳令の発せられた非常事態にながく堪えられずに悲鳴をあげるのは、権力の客体ではなくてむしろ権力主体の側である。それは、『権力のエコノミックス』の観点からみて、まことに不経済な状態といわざるをえない。」木村汎「権力とはなにか」、高坂正堯/渡辺一編『政治を学ぶ人のために』(京都：世界思想社、1971)、p. 84 参照。

43) *XXII съезд К.П.С.С.*, т. 1, стр. 114-115.

44) *Там же*, стр. 117.

45) Azrael, "Is Coercion ...?", p. 12.

46) アズラエルによると、公衆的組織によるコントロールは、「体制による効果的なコントロールの幅を拡大する」、つまり、「よりフォーマルなコントロール手段がこれまで接近しえなかった生活領域にたいする党のヘゲモニーを拡大する」という目的に資する。*Ibid.*; *id.*, "The Party and Socie-

同志の「すべての分野における無赦の眼」(J. アダムス)⁴⁷⁾による見張りであり、その制裁も、そもそもグループ・プレッシャー⁴⁸⁾(例——「村八分」)として強力なうえに、さらに「非難の大衆競争」(同)⁴⁹⁾を導き、倍乗され、いやがうえにもエスカレートされがちだからである。フルシチョフは、このように「全人民が、(互いに)警察官となる」⁵⁰⁾(A. アズラエル)ことが究極の理想であるという自己の考え——それは、レーニンの「全共産主義者が、チェキスト(=秘密警察「チェカー」員——木村)となるべきである」⁵¹⁾との言葉の拡大である!!——を、少しも隠そうとしていない⁵²⁾。たとえば、彼は、述べている：

「究極の目標は——すべての市民が、たんに法そのものに従い、労働規律を守り、国家的・公共的資産を守り強化し、社会主義的共同体の規律を遵守するばかりではなく、他のすべての市民も同じことを行い、すべての反社会的行為に抗する闘争を行うよう要求することである。」⁵³⁾(強調点—木村)。

かくて、「人民の名における」、「人民による」統制たることを掲げる「公衆コントロール」制が、必ずしも「人民のための」ものではなく、むしろ「人民にたいする」統制とさえ転化する契機を秘めていることが、明らかとなろう。かように「公衆」という名を借りて、必ずしも人民の利益増進とばかりとはいえない、そして時としては人民の利益に反する行為すら強要する側面——正にこの点にこそ、西側筋が、フルシチョフ主義を「似非人民主義」(pseudo-populism)と断じ、また本稿筆者が一貫して“общественное начало”を「人民主義」の原則と訳さずに、頑なまでに「公衆主義」の原則という、きわめて日本語に熟さない用語に固執している根拠が存するのである。

(3) 筆者の見解。以上、ソビエト公式説明にひきつづき、西側専門家たちによって指摘された四つの事由を紹介した。最後に、ややもすると西側専門家筋により軽視されがちとはいえ、本稿の筆者個人が、フルシチョフ「公衆主義」を生みだした契機として決して見逃してはならないと考える、いま一つの重要要因を、補足したい。

西側観測者は、「公衆主義」の思想が、幹部(重視)主義にたいするその絶好の対抗理論的内容のゆえに、そもそもスターリンのアンチ・テーゼとして登場、その支配を正当化したフルシチョフにとり、望みうる最良の理論的道具となったと主張する。この指摘は、疑いもなく正しい。つまり、「公衆主義」が、フルシチョフ統治の *raison d'être* に奉仕するという権力欲の契機、戦術的側面をもっていたことは、何人も否定しえない事実である。しかし、この局面を余り強調しすぎると¹⁾、フルシチョフ「公衆主義」を生みだし、

ty,” in Allen Kassof (ed.), *Prospects for Soviet Society* (New York: Frederick A. Praeger, 1968), p. 68.

47) Jan S. Adams, “‘People’s Control’ in the Soviet Union,” *Western Political Quarterly* (Vol. 20, No. 4, Dec., 1967), p. 926.

48) 政治的支配のテクニクとしてのグループ・プレッシャーの動員化ないし制度化について, Azrael, “The Party and Society,” p. 68; *id.*, “Is Coersion Withering Away?,” p. 12 参照。

49) Adams, *op. cit.*, p. 926.

50) Azrael, “The Party and Society,” p. 68.

51) *Ibid.*, p. 68 から再引用。

52) もっとも、フルシチョフは、1959年5月5日おこなった西ドイツの社会民主主義諸紙の編集者との対談中において、「諸君は、時折西欧で、ソ連人の一人一人に数人のチェキストがついて責めさいなんていると、我々を描こうとしている」という不満を表明した。*Правда* (6 мая 1959 г.)。

53) *Правда* (10 марта 1959 г.), стр. 1.

1) Cocks は、「公衆参加」というフルシチョフ政策を、たんに、そして主として、「新しい全体主義

「公衆主義」の陥穽

促進したもう一つの側面を看過することになりがちである。

筆者のいういま一つの契機とは、フルシチョフ個人の理想的ソビエト社会像とでも名づけるべきものである。つまり、筆者は、(i) フルシチョフには、自らが理想と考えるソビエト社会のイメージが存在し、しかも (ii) そのようなイメージと彼が推進した「公衆主義」の内容とが、密接な関係をもっていたに違いない、と考えるのである。(ii) は、(i) と同じく、未だ筆者が充分には論証しえていない仮説の段階にとどまっているが、少なくともフルシチョフの胸中に懐胎されていたあるべきソビエト社会の姿と彼が熱心に唱導した「公衆主義」の趣旨とが、互いにまったく背馳・矛盾するものと想定することは、不自然かつ困難と思われるのである。たとえ両者を完全に合致するものとは看なしえないにせよ、相互に重なり合う部分が多いと考える方が、素直な受けとり方であろう。このように理解してはじめて、フルシチョフが「公衆主義」運動の推進に傾けた情熱の程を、より正確に把握しうると思われる。

では、(i) において筆者の意味する、フルシチョフの理想的ソビエト社会イメージとは、何か？ フルシチョフ自身が必ずしも明示的、系統的に語っていない、そのような彼のイメージを、強いて我々の言葉で表現すれば、一種の〈政治的共同体〉(the political community)²⁾なる用語に要約されるであろう。それは、フルシチョフ自身の言葉を借りれば、「社会主義的有機体 (социалистический организм)³⁾、すなわち、「全ソビエト人民が、統一した、一枚岩的労働集団となって、共産主義建設に積極的に参加する」⁴⁾社会である。そして、フルシチョフは、「協同的に課題が遂行」⁵⁾されてゆく、自らが理想とするかような社会を、屢々、蜜蜂の巣箱⁶⁾やオーケストラの比喻で、説明している。たとえば、1963年3月8日におこなった党・政治指導者の文学・芸術家たちとの会合における演説中で、彼は、述べた、「われわれは、組織された社会主義社会、すなわち個人の利益が、社会の利益と合致し、それと対立しない社会に住んでおり」、「各人は、巣箱のなかの蜜蜂のように、自己の貢献によって社会の物質的・精神的富を充分なものにせねばならないのである」⁷⁾、と。さらに、このような社会における共産党(エリート)の役割は、フルシチョフによれば、次のようなものである：「オーケストラの指揮者が、すべての楽器を調和と釣り合いの上に鳴り響くようにするのと同じ様に、共産党は、社会・生活において、全ソビエト人の努力を統一目標の達成に向けて指導する。」⁸⁾

ここで恐らく何人によっても提起されるであろう問は、以上のごとき社会像を果して特殊フルシチョフ的ヴィジョンと看なしうるか、という問題であろう。つまり、オーケスト

的指導者による、自分自身の権力ならびに、政治システム内における党のヘゲモニーを高めるための偽装せる努力」とだけ看することは、誤りであろう、と述べている。Cocks, *op. cit.*, p. 167.

2) Breslauer, *op. cit.*, p. 21, 22, 28, 29.

3) Хрущев, *там же*, т. 3, стр. 69.

4) *Правда* (10 марта 1963 г.), стр. 1.

5) Breslauer, *op. cit.*, p. 22.

6) フルシチョフは、ソビエト市民が強いられている、社会主義や共産主義とはおよそ縁遠い、狭い住宅状況を「蜜蜂の巣箱」に喩えたこともある。Khrushchev *Remembers: The Last Testament*, p. 87; 佐藤訳, 上巻, p. 100.

7) *Правда* (10 марта 1963 г.), стр. 4.

8) *Там же*.

ラの調和や蜜蜂の貢献の喩えであらわされる〈政治的共同体〉は、なにもフルンチョフをもって嚆矢とするのではなく、歴史上あるいは少くとも「社会主義」ソ連史上の殆んど全ての為政者の夢でないのか？ 政治思想史の素養を全く欠く筆者ではあるが、この間は、きわめて当然かつ正当と判断される。指導者のタクトに合わせ、各構成員が与えられたパートに勤しみ、全体として調和と統制が保たれる社会——これは古今東西の為政者にとり、望みうる最善の理想郷であろう。もとより、「個」と「全体」の利益が完全に合一する、かような社会は、現実には到底現出しえないユートピアないしゾルレンの域にとどまる事柄であろう。然しにもかかわらず、かような〈政治的共同体〉は、多くの為政者たちにとり依然として魅力の対象たることを焉めないのである。けだし、実態の如何にかかわらず、かような社会を目指しており、すでに少くとも部分的にそのような〈共同体〉を達成していると僭称ないし擬制すること自体が、為政者たちに図り知れない実益を齎らすからに他ならない。（したがって亦、古来多くの政治思想家——たとえば、プラトン、カントは、そのごく一例——は、このようなフィクションの効用と危険性、すなわち蜜蜂社会を人間集団のモデルに擬して、結局「全体」の利益のために成員「個人」の滅私奉公の協力を図ることについて、称揚や嫌悪を表明してきているのである⁹⁾）

つぎに、西欧政治思想一般からマルクス・レーニン主義思想へと視野を限定してみても、フルンチョフだけが〈政治的共同体〉理論の提唱者でないことが、明らかである。というのも、マルクス・レーニン主義思想を遵奉する全ての「共産主義」政治家たちは、G. ゴールドマン教授の名付ける「連帯社会 (the solidary society)」¹⁰⁾をゴールとする点において、軌を一にしているからである。連帯社会とは、「共通の価値観によって動機づけられ、共産主義建設なる単一の一般目標に向けて努力する、共同一致のユニット」¹¹⁾である。したがって、そこでは、「全員の目標は、各成員の目標である。すなわち、そのゴールという点において、社会、国家、党、個人は、一つである。社会の目的から逸脱した目的のための余地は存在しない。」¹²⁾レーニン、スターリン等ソ連の政治指導者たちがこぞってかような内容の「連帯社会」観を抱くルーツは、ゴールドマンも指摘するように、「マルクス主義の歴史的決定論、同じくその独特の階級理論、共産主義支配の専制的・全体主義的側面、共産主義体制が慢性的に見舞われる国家存亡の危機、そして帝制ロシア社会からの歴史的遺産」¹³⁾等、に求められる。

では、フルンチョフの〈政治的共同体〉ヴィジョンは、彼の先達レーニンやスターリンのそれと全く同一なのか、と言えば、答は、部分的にイエスであり、部分的にはノーである。まず、フルンチョフの〈政治的共同体〉も、結局ゴールドマンのより一般的な概念「連帯社会」観に包摂されるという意味において、イエスである。換言すれば、それは、

9) 渡辺孝『ミツバチと人間』(東京：黎明書房、1974)、pp. 52-53; pp. 155-212; 勝田吉太郎『革命の神話—社会主義に未来はあるか—』(東京：講談社、1976)、pp. 102-104 参照。

10) Gregory Grossman, "The Solidary Society: A Philosophical Issue in Communist Economic Reforms," in *id.* (ed.), *Essays in Socialism and Planning in Honor Carl Landauer* (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc., 1970), pp. 186-187.

11) *Ibid.*, p. 186.

12) *Ibid.*

13) *Ibid.*, pp. 186-187.

「公衆主義」の陥穽

上述した共通ルーツに発し、共通問題に対処するものとして、レーニンやスターリンの政治理念から大幅に逸脱する突然変異的なものでありうる筈はない。フルシチョフは、スターリン主義には部分的には反逆を企てたとはいえ、なんども繰り返すように、レーニンの思想や言葉には頑なまでに忠誠を誓っているのである。早い話が、上に紹介したフルシチョフによるオーケストラの比喻も、その演説がなされた折の特定の聴衆すなわち芸術家たちを十二分に意識して用いられたものであると同時に、偉大な先達レーニンの模倣なのであった。つまり、オーケストラの比喻は、レーニンが一再ならず用いたもので¹⁴⁾、たとえば、1902年には、つぎのように述べている。

「中央が（これまでの如く）忠告し、説得し、討論するのみならず、真にオーケストラを指導しうるために、正確に知ることが肝要なのは、誰が、どこで、どんなバイオリンを弾いているのか、そしてどこで、どんな楽器を、いかにマスターし終えたところであり、マスターしつつあるか、そして誰が、どこで、なぜ、音階を外れて弾いているのか（…）、そして誰が、いかにして、どこへ、この不協和音を調整するために、配置変えされるべきであるか、等々である。」¹⁵⁾

しかし、他方、フルシチョフの〈政治的共同体〉理念は、レーニンやスターリンのヴィジョンと全く同一ではない。なぜなら、ソ連の歴代の政治指導者たちは、均しく「連帯社会」観を基本的には共有しながらも、その各々がそのなかに具体的に盛りこんだ内容やイメージの差異が存在するからである。レーニン、スターリン、フルシチョフの全てが、オーケストラの合奏で表される「連帯社会」における指揮棒すなわち党エリートの指導性(руководство)を最重視したことは、疑いの余地なく共通している。と同時に、筆者は、そのような社会において、レーニンが「分業」、スターリンが「区別」、フルシチョフが「調和」の契機を強調していたと考える。レーニン主義の中核が、その前衛思想に求められることに、何人も異論あるまい。彼は、つねに、人間集団における各部門担当者間の役割分担（「分業」）の重要性に着目していた。スターリニズムにあっては、一部少数の指導する者（幹部ないしエリート）と圧倒的多数の指導される大衆との間は、懸け橋のない二つの別箇の存在として「峻別」された。しかるに、フルシチョフ主義の特色は、成員すべてを社会にとり均しく重要な構成分子として取扱おうとする点に求められる。フルシチョフにとり、共産党の幹部と一般平党员、共産党员と非共産党员との区別は、彼らの「いずれもが、一つの共通の仕事をおこないつつある」（フルシチョフ）かぎり、さして重要でないのだった。たとえば、すでに引用済みの諸発言（115, 123 ページ）の他に、フルシチョフは、モスクワにおける農業労働者会議（1955. 4. 7）の席上においても、つぎのように述べている：

「この会議には地区の党書記たちが座っており、恐らく、一体、なぜ、フルシチョフは、非党员も在席しているこの場所で、そのような話をするのか、といふかるであろう。同志諸君、われわれ全ては、党员も非党员も、一つのこと——すなわち我が祖国の繁栄を欲しているのだ（嵐のごとき拍手）。」¹⁶⁾（下線—木村）。

14) レーニンは、1903 年にも、つぎのように述べている。「われわれには巨大な合奏^{コンサート}が必要である。すなわち、合奏のなかの各役割を正しく配分するために、ある者には感傷的なバイオリンを与え、他の者には荒々しいコントラバスを与え、第三の者には、指揮棒を委ねるために、われわれは、自ら経験をつむ必要があるのだ。」*Ленин, Собрание, т. 8, стр. 96.*

15) *Там же, т. 7, стр. 22.*

16) *Хрущев, Строительство коммунизма ..., т. 2, стр. 96.*

同様に、フルシチョフにとって、労働者、農民、インテリゲンツィアという古典的マルクス・レーニン主義の階級ないし階層区分すら、「全人民」という概念の前には、色あせるのであった（フルシチョフのいわゆる「全人民国家」、「全人民の党」理論¹⁷⁾）。

(未完)

Pitfall of “Public Principles”

—The Failure of Khrushchevism— Part (II)

Hiroshi KIMURA

Introduction —“Khrushchevism”—

Many doubt the possibility of establishing “Khrushchevism” as a separate, independent concept. They tend to characterize Khrushchev as a “transitional leader.” The writer of this paper, however, believes that Khrushchev did leave quite an unique imprint upon Soviet society, for which his name should be remembered in history.

Then, what are the main features of “Khrushchevism”? Unfortunately, there is no definite answer for this question. The characteristics of “Khrushchevism” on the domestic scene, in the present writer’s view, should be sought in the following two points: (1) its uniqueness in means for further industrialization of the USSR, i.e. the intensive use of *material incentives*, especially expansion of the boundaries of their beneficiary from the elite to the masses, with the purpose of raising their labor productivity; (2) its special emphasis on the “public principles,” replacing the Stalinist “cadre-oriented.” Since the first aspect was already dealt with in separate papers of this writer, the second will be discussed in the present paper.

I. What are “Public Principles”?

The nucleus of the “public principles,” a translation of the Russian word “obshchestvennye nachala,” lies in the idea of inclusion of the Soviet public masses, who were long neglected, especially during the Stalinist era, into political, economic and cultural activities. Although the literary meaning of public principles sounds quite close to the term “public participation” in the Western world, the complete equation of these two words is of course misleading: for, when Khrushchev was campaigning for his “public principles,” he was not necessarily intending to promote the interest of the masses in themselves but rather to utilize their initiatives and energies to justify the regime, expand the economy, and consolidate his own power.

At any rate, Khrushchev never tired of calling for these “principles.” He stated, for instance, the Party apparatchiki and government officials should “go to the people (narod),” “work with them,” “treat them with consideration,” and so forth. The Program of the C.P.S.U. (1961), which is rightly considered as a “Khrushchev” constitution, states also that “the Party considers systematic renewal of the leading bodies

17) 木村前掲『『全人民国家』論とその後』参照。

in order to draw a wider range of able workers and collective farmers into state and Party administration.”

Khrushchev's idea of populist principles appeared in many concrete devices and measures under the reign of Khrushchev, such as, comrade's courts, people's guards, the Party-State-Control Committee, theories of the “all-people's state” and “all-people's party,” etc.

Khrushchev adhered such great importance to the “populist principle” that sometimes we are tempted to suspect that he did forget the iron law of power politics, namely, the delineation between the leader (“elite”) and the led (“the masses”).

II. Background of the “Public Principles”: Motivations and Aims of Khrushchev

What, then, caused Khrushchev to adopt the “public principles” as a mainstay of his whole design of rule? For what purpose did he intend to resort to these principles? This chapter of the paper deals with factors behind Khrushchev's “populist” posture. Let us first take up the Soviet, then the Western, and finally the writer's explanations to this issue.

(1) Soviet official explanation :

The official statement by the Khrushchev government was based on the very simple syllogism : 1) the “public principles” were originally Lenin's idea ; 2) unfortunately, however, during the cult of the Stalin era this norm was severely curtailed ; 3) now it is absolutely necessary to restore this original Leninist spirit.

Part of this Soviet justification is acceptable even for us, since it is an undeniable fact that the Stalinist elite-oriented policy, which might make it inevitable for the country to “take off” quickly and successfully, resulted in the exclusion of the majority of the Soviet population from the spheres of political decision-making as well as from material rewards. On the other hand, however, it is debatable to consider the “public principles” as the Leninist norm, because it is crystal clear that the core of Leninism lies in its emphasis upon the role of the vanguard, but not upon the masses.

(2) Interpretations by Western scholars :

First, Western experts on Soviet affairs point out that Khrushchevite populist policy had a distinctly anti-elitist tinge. Namely, “public principles” were sort of an attack upon Soviet bureaucracy : they were intended to serve as a control and check of the arbitrary, irresponsible and inefficient attitudes and behavior among state and party apparatchiki.

Second, in close connection to this, Western observers do not fail to notice that the greater drawing of the masses in official work was also encouraged by practical, economic reasoning : voluntary labor by non-paid citizens is nothing but the cheapest available under heaven ; therefore, its extensive use could economize greatly the number and cost of staff functionaries, which have been more increasingly demanded as the country's modernization process proceeds.

Third, it would be incorrect to view the roles assigned to the masses by Khrushchev only and primarily as subsidiary roles to check or assist the cadres, as might be suggested by the two reasons mentioned above. The rise and development of the

populist policy were also motivated by Khrushchev's intention to overcome the Stalinist legacy, i.e. the apathy and passivity prevalent among the Soviet populace in practically all activities of Soviet life and also, to regain initiative and vitality among the masses in order to advance further industrialization of the country.

Fourth, the "public principles" can provide the Khrushchev regime with tacit, and very powerful mechanism of control over the people, since after all it is the neighbors, friends, and colleagues that can serve each other best chekist. The Khrushchev regime, more than any other Soviet regime, realizing the usefulness of group pressure among citizens (such as shaming at "public" meeting or "public" trials at comrade courts), encouraged more and more Soviet citizens to be concerned with each other's behavior, thereby checking any small and private deviance.

(3) Additional view by the Writer of the Paper :

Concurring with Western specialists on Soviet affairs in all four points described above, the author of this paper adds still one more factor which must have motivated Khrushchev's drive for "public principles": that is, Khrushchev's vision of the ideal Soviet society, i.e. the harmonious society. He often explained his ideal society by using the analogy of an orchestra or a beehive. Of course all other Soviet leaders have also envisaged such a "solidary society" (M. Goldman) as their ideal. But, while Lenin put more importance on *division* and Stalin on *distinction* of the members in such society, Khrushchev seems to the author of this paper to have emphasized *harmony*.

(Continued on a coming issue of this periodical)